

Title	考古学的意味での家畜化とは何であったか 人 羊・ 山羊間のインターアクションの過程として
Author(s)	谷, 泰
Citation	人文學報 (1995), 76: 229-274
Issue Date	1995-03
URL	http://hdl.handle.net/2433/48450
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

考古学的意味での家畜化とは何であったか

— 人・羊・山羊間のインターアクションの過程として —

谷

泰

- I はじめに
- II 消費動物遺骨が示す〈新たな出来事〉
- III 現在の管理群における連続性
- IV 家畜群と再野生化群との対比
- V 家畜群と半家畜化トナカイ群との対比
- VI 人の居留地への繋留はいかにしてなされたか
- VII 居留地への繋留がもたらした〈新たな事態〉
- VIII おわりに

I はじめに

牧畜とは、家畜化（domesticate）された動物を恒常的に人間の管理下で飼養することをつうじて、食糧をはじめ、生活に必要な動物資源を獲得する、生活技術の体系である。

もちろん、この牧畜という生業技術を開発する以前、人類は、いわゆる野にあって、ときおりわれわれの前に見えかくれする野生動物の狩猟をつうじて、生活資源をえていたことはいうまでもない。このことは、やがて家畜化されることになった祖先野生種についても同様であり、はやく家畜化された羊にせよ、山羊にせよ、牛にせよ、家畜化するにいたるまで、人は、直接的な接触を許さない野生種としてそれらを見だし、自然からの強奪対象として追跡、捕獲、殺害したうえで、それらを食用に供していたにすぎない。

ところで、これらの動物種が家畜化される以前、ひとびとが狩猟を通じて、どのような動物種を獲得・消費していたか。われわれは、それを、家畜化がもっともはやく達成されたといわれる中近東の住居跡から出土する旧石器時代層の動物遺骨についての考古学者の報告から知ることができる。もちろんそのなかには、羊、山羊、牛、馬など、のちに家畜化されることになった五指にもみたくない動物種の祖先野生種も含まれてはいる。しかしそこで狩られていた動物種の数を、家畜化された動物種の数と比較するとき、家畜化以前に狩猟されていた動物種のヴァリエティの多さに驚かされる（235頁：表1、アンダーライン参照）。

ところが牧畜の開始とともに、出土する動物種のヴァリエティは漸次減少し、住居跡によってその推移に差異はあるにしても、消費された動物遺骨のなかで、それまでより多くを占めていた鹿、オナゲル、ガゼルにかわって、羊、山羊、牛という家畜化された動物種のしめる割合が増加する (Payne, S., 1975, Clutton-Brock, J., 1978, Davis, S. J. M., 1982, Legge, S. J. and Rowley-Cowny, P. A., 1987, Davis, Simon J. M. 1993)。そして、かつて狩猟生活者によって占められていた地域が、かぎられた家畜種を消費する牧畜生活に依存した地域におきかわる。その移行・交替をしめす図が、考古学的データをもとに作成されており、考古学的時間としては、いかにも短いあいだにその移行・交替が広範に進行したかを知ることができる。

いうまでもなく、牧畜の技法は、狩猟の技法と比較したとき、明らかに労働効率と資源獲得の安定性においてすぐれている。いったんそのような技術が開発されるや、それなしにはすまないといった不可逆性によって、生活技術上の交替が起こる。まさにその図は、生業技術としての牧畜の技法が、農耕の技術の伝播力にも比しうる革新性をもった技術体系であったことを、よく示している。ただ、この段階への移行は同時に、利用する動物種のきわめて限られた範囲への限定でもあった。その意味で、家畜化とは、それまで狩猟の対象となっていた多くの動物種のなかのほんの一部の種だけを、それぞれの本来的な生活域から引き離し、人為的管理下で成長と繁殖を達成させ、人間にとって有意義な生活資源を、より安定的に供給する一つの革新的な技法の開発であったということになる。

ただ、このような狩猟から牧畜への移行の早さを示す図から読み取れる、牧畜という技術体系の革新性と裏腹に、牧畜という生業技術体系が、いかに物質文化としての道具に依存するところが少ないか。かつて民族学博物館で、牧民の展示にかかわったことのある人ならば、だれもが実感している (Digard, J. P., 1990: 207)。かれらが生業に関連して使用する道具と言えば、放牧中に群行動管理のために使用する杖や投石具や石、搾乳のために準備した追込み柵、搾乳用の容器や皮袋、また屠殺や去勢のためのナイフといったものがせいぜいである。しかもこれらの道具のうち、投石具や追込みの柵といったものは、それなしに済まそうとおもえば、それでも十分に家畜の管理は可能である。こうして、居住用のテントをさておくと、必携の用具といえば、たかだかナイフ、斧、杖、容器、そして乳加工用の皮袋といったものですべての用が足りる。事実、そのようなものだけで、全てをまかなっている牧民の事例を示すことはさほど難しいことではない¹⁾。しかも、これらの用具は、狩猟的生活者の持ち物としてすでに用いられていた、とさえ言いうる。つまり物質文化的にみて、狩猟段階にとりたてて新たなものを付け加えていないのである。

またかつて牧民のテント地に滞在して、彼らの移動について行動をともしたことのある人ならば、彼らが、移動に軽便な用具をしかもたず、移動の跡に、生活の痕跡を物として刻みつけることが、いかに少ないかを知っている。移動日の朝、朝食を済ませてから、テントをたた

み、荷物をまとめて、馬やらばの背に縛りつけて出発するまでの時間は、たかだか小一時間あれば十分である。いや緊急時には、一〇分内に出発することさえあるといわれ、かれらがいかにかに軽装備であるかを物語っている (Glatzer, B.1977,S.73.)²⁾。そして彼らとともに出発して、宿営の跡ををふりかえるとき、そこにはたかだか炊事をしたことを証拠づける焚火の跡、そしてテントの周辺に、風よけのために積みかけた若干の石が転がっているに過ぎない。それを、農耕民の集合的かつ恒久的な住居や、畑に水を導く灌漑施設、そして畑といったものと見比べてみるとよい。これらは繰り返し同じ場所において使用され、世代を超えた遺産として継承される物質文化的構築物である。ところが、牧畜民の人為的行為の証拠は、いまここ、そのときどきの家畜との行為のやりとりにおいて確認できるものでしかなく、歴史を超えて、その生活のさまをのちに伝えるよすがとなるものをもたない。まさに技術情報の存在を後に伝える物質的刻印の欠如、そしてその行為の痕跡のかげろうのようなうつろいやすさは、農耕民との顕著な対照をなしている。

ここでまず、技術のひとつの表現としての道具というものを、身振りとの係わりのうえで論じた、つぎのようなルロア・グーランの『身振りとことば』からの一文を引用しておく。そこでかれが述べていることが、道具においてきわめて貧困なものをしかもっていない牧畜の技術を考えるにさいして、ひとつの有益な示唆を提供すると考えるからである。

「技術というものは、まさしくある種の統辞法によって、連鎖的に組織化された身体動作と道具からなっている。そしてその統辞法こそが、われわれの一連の行為連鎖に、安定と柔軟さをもたらしめている。しかもこの動作の統辞法というものは、記憶を通じて提示され、脳と物質環境との係わりのうえで生成されている」(Leroi-Gourhan,1964,vol.1:164)。ところで「道具の形態分類、そして製作過程の分析にかぎった生活技術の研究というものがあるとして、それが民族学ととり結ぶ関係は、(システムとして動物対象それ自体を考察する)体系的な動物学が動物生態学ととり結ぶ関係と同種の関係にある。道具は一連の身体動作のなかでしか存在しない。こうしてわれわれは、この道具のうちに、この動作がいかなるものであったかを示す意味深い痕跡を見いだすことができる。このことは、馬の骨格が、かってがっしりとした骨格をもって足早に駆けていた草食獣の生活様態を痕跡として示していることと、同工異曲な事実なのだ。……(道具をめぐる)体系的な生活技術研究は欠くことのできないものであるにしても、道具は、それによって道具の技術的有効性が発揮されることになる身体動作のなかでしか存在しない」(Leroi-Gourhan,1964,vol.2:35)。

かれがここでまず強調していることは、「技術というものは、まさしくある種の統辞法によって、連鎖的に組織化された身体動作と道具からなっている」ということである。しかも道具というものは、プログラムされた記憶というかたちで脳にセットされた一連の行為連鎖によって、身体動作と組み合わされることによって、その有効性を発揮する。つまり、道具はそれ自身で

存在するのではない。それが位置するトポスは、まさに知的にプログラムされた行為連鎖のうちにあり、身体の延長上にある、と言っているのである³⁾。

ただ、技術は、機械や道具においてその真のあり方をしめし、その進化は、その機械や道具の多様化や効率化において証拠づけられる、という一般的な理解がかってあったこともまた事実である。とりわけ産業革命以後、機械的技術の効率化、そして多様化を目のあたりにした時代において、それはいかにも説得的な命題であり、文明の単系的な進化図式が支配的な時代において、それはいかにももっともなものとして受け入れられた。技術史研究とは、おもに道具や機械のエラボレーションを指標にしてなされ、それによって技術史記述は完全なものとなるかの印象を与えた。そして物質文化的証拠からしか生活史の証拠がえられない先史時代の問題を考えるさいにも、この指標はある一定の意味をもち、生活技術上の道具として、きわめて貧弱なものをしかもっていない牧畜的生業の発生段階についての偏った見解をさえ生んだのであった。

たとえばその一例を、十九世紀後半において、人類の進化史を著したモルガンの言葉のうちに見ることができる。かれはそこで、狩猟、採集、牧畜、農耕という四大生業の発生段階を論じたが、やがて都市文明へと移行する中近東の農耕民と比較して、まさに牧畜的生業の原初形態としての遊牧民が、きわめて貧弱な生業用具をしかもたず、つねに移動している事実から、牧畜という生業を、農耕に先行する、よりプリミティブなものと位置づけたのであった(Morgan, L.H., 1877: 27)。また、生産手段と生産関係の弁証法的な発展のうえで、社会の進化を記述できるとしたエンゲルスもまた、モルガンの見解に沿って、『家族、私有財産、国家の起源』において、牧畜的段階を、農耕の起源に先行するものとして位置づけた(Marx, K., 1884: 126 and 88-9)。かれが、モルガンの主張をもっともだともみなした背景に、都市的文明中心から離れた地で遊動する遊牧民を野蛮の民とみなす、歴史的に形成された固定観念に加えて、かれらの生産用具の貧弱さというものがかかわっていたことはいままでもない。「技術の進化は、道具や機械において証拠づけられる。その欠如は、技術の欠如とはいわなくとも、その低さをしめす」とでもいった前提が、この時代の進化論的な歴史観とあいまって働いていたといつてよい。

それにしても道具や機械なしに、技術的行為というものは存在しないものか。ここで、このような問いを立ててみることは、無意味ではない。たとえば、人類が発生して以来、たえず繰り返えされてきた育児の技法というものを考えてみよう。その技法を構成する技術的行為の大半は、見つめ合い、触り、特定の仕方での抱き、そしてときに声をあげて叱り、矯正するといった、種々の身体的・言語的行為からなっている。それは、微妙かつ繊細な対象認知とそれへの働きかけの連鎖によって達成されており、親から子に、代々受け継がれつつ、一定の慣習的なプログラムとして成立している。もちろんこれらの身体行為の連鎖のなかに、ときに哺乳器や

背負い具が、道具として挿入されることはある。しかしこれらはけっして必須の物ではなく、育児の技法はそれなしにも十分に成立している。またここで育児の技法が、ひとのひとへの働きかけであり、いわゆる自然対象に向けられた技術ではないというのなら、狩猟民の獲物への接近の技法を考えてみてもよい。そこには、当該対象動物種の習性に応じた、経験を通じた微細な知識が働いており、固有の口笛や、対象への特異的な接近の手法というものがある。いずれも、まったく道具を介さない、コミュニケーションな対象操作の技法と言いつて、高度な身体上の行為連鎖としてプログラムされていながら、けっして道具（現代における情報機器を駆使した道具はさておくとして）によって代替できない。

上の引用文でルロア・グーランが論じたのは、技術にとって道具とはなにかという点であった。かれはそこで、主体と自然環境との係わりのうえで成立する一連の行為連鎖のプログラムこそが技術であり、技術にとって道具は必須の基本的要素ではない。道具はたかだか、より基本的な身振りとともに、知的に行為する人間の脳に記憶された一連の行為連鎖の部分的環をなすに過ぎない。このように言っていた。子育ての技法はもちろんのこと、狩猟民の対象への接近の技法も、また牧畜の技法も、いかにそこで用いられる技術的な道具が貧弱であろうとも、それらは、一定の知的行為者の脳に埋め込まれ、しかも親から子へと模倣をもって継承される。そして、それぞれにおいて固有のプログラムをもった行為的連鎖として、複雑な道具をふくむ他の技術的行為と、なんら区別されるものではないのである。

ただここで、土地を耕す技術や灌漑の技術と、家畜を管理する技術とに差異を指摘するなら、前者は物質的对象に対する物理的働きかけであるのに対して、後者は生物としての動物へのコミュニケーションなレベルでの働きかけであるという点にある。後者において、物理的道具を使用する度が低いのは、まさにこのような対象への働きかけのレベルでの差異にもとづいており、そこでなされる自然過程への関与とは、後にも示すように、感覚的刺激にもとづく行動上の強制、インプリンティングによる親和性の醸成、集団が本来もっていたナチュラルな社会関係の改変といったものである。これらの働きかけは、おおむね道具を介さず、人為的な関与によって実現される技術的行為である⁴⁾。ただ、もしそれらが、目的達成のための効率性と安定性をもつなら、採用される道具がいかに貧弱な技術体系であっても、十分技術的革新性を持ち、不可逆なものとして、新たな段階を画するというわけである。このように考えるなら、牧畜という生活技術は、たとえ狩猟段階での道具に、とりわけ新たなものを付加しなくとも、まったく新たな技術的行為連鎖の体系として、狩猟段階からのテイク・オフを可能にしても、なんら不思議ではないことになる。

おまけにわれわれは、かつて、物質文化においてきわめて貧弱なものをしかもたないために、農耕の技術よりはプリミティブな生活技術であり、農耕の開始以前のものだと思われていた、この牧畜の技術が、中近東において、意外にも、農耕の開始以後に確立していることを、いま

や確かなこととして、知らされるに到っている。それは、今世紀の半ばから精力的におこなわれた動物考古学者の成果によるものであり、かれらは、中近東の新石器時代以降の住居跡において消費された動物遺骨の子細な研究を通じて、牧畜に関する決定的な技法の確立をしるす証拠が、ほぼ紀元前8000年紀末以降に出土する羊・山羊の消費遺骨から読み取れると主張している。しかもおそらく肥沃な三日月地帯の北縁、ザグロスの丘陵地において、そのもっとも早い事例が見いだせると言っているのである。もちろんこの事実も、消費遺骨の存在様態という、きわめて間接的証拠によって推論されたものであり、いわば考古学的な意味での家畜化の開始を指摘したものではある。しかし、すくなくとも歴史時代以降に広く展開した牧畜の技法の基本的要素が、ほぼこの時点で整えられたということは、後に示すような証拠からほとんど確かである。牧畜の起源は、こうして、この地域において確認されている麦の栽培化を基礎にした農耕の開始よりは、2000年余り降った時代での出来事だということになった。

牧畜という生活技術は、たとえ狩猟段階ですでに存在する道具以上のものを付加しなくとも、狩猟段階よりもより効率的で、より恒常的に動物資源を獲得することを可能にした、新たな技術体系であった。そしてさきのルロア・ゲーランの言葉を借りるならば、それは、知的主体としての人間と家畜化されることになった当該動物種とのインターアクションのうでで成立した、新たな技術的行為連鎖の体系である。そして、新たな技術的道具を付加することになった同じ地域の農耕の開始よりも遅れて確立されたものだ。半世紀におよぶ動物考古学世界での精力的な研究のおかげで、われわれはこうして、かつてあった生業の進化段階に関する、用具論的な見解の無効性を知らされると同時に、牧畜技法の起源にかんする問題のうち、いつ、どこでという問いに関しては、ある程度の時代的、地域的範囲を確定することが可能になっている。

ただ、この牧畜という技法が、技術主体としての人間と、家畜化されることになった当該動物種とのインターアクションのうでで成立した、新たな技術的行為連鎖の体系であるとして、その技法が、それまで狩猟対象になっていた多くの動物種のうち、きわめて限られた動物種だけに適用されている、ということは注目に値する。このことは、家畜化ということが対象動物の特殊性を度外視しては考えられないことを示唆している。そして、その技法の資源獲得上の革新性、そしてその技法の成立時期や場所の問題とは別個に、それまで狩猟対象になっていた多くの動物種のうち、かくもかぎられた動物種だけが、1) いったいなぜ、2) どのような動機によって、3) いかにして家畜化されることになったのか、という問いを生じさせる。それは言い換えれば、この考古学的な意味での家畜化の開始とみなされている時点で、いったいいかなることが起こったのか。その時点で、いったい人と当該動物とのどのような関係が新たな出来事として発生したのかという、まさに家畜化の時期における、人と羊・山羊との具体的なインターアクション過程に関する問いだといってよい。

もちろんこの疑問のうち、1) いったいなぜ、このような特定の動物種だけが、家畜化され

表 1 : 中近東の哺乳類と家畜化された動物種の範囲

網かけ : 家畜化された動物種

アンダーライン : 少なくとも狩猟されていた動物種

(中近東の哺乳類については, Hunn, E., 1979: 106-107 参照。すなくとも狩猟されていた動物種については, Bökönyi, S., 1978: 60 参照)

目	科	属/種
Insectivora(食虫目)	Erinaceidae(ハリネズミ科)	ハリネズミ類
	Soricidae(トガリネズミ科)	トガリネズミ類
Chiroptera(翼手目)	eight families(8科)	コウモリ類
Primates(霊長目)	Hominidae(ヒト科)	ヒト
Carnivora(食肉目)	Mustelidae(イタチ科)	テン, クサネコ, イタチ, アナグマ, カワウソ
	Ursidae(クマ科)	Ursus arctas <u>クマ</u>
	Viverridae(ジャコウネコ科)	マングース, ジュネット
	Hyaenidae(ハイエナ科)	Hyaena hyaena <u>ハイエナ</u>
	Canidae(イヌ科)	Canis <u>イヌ</u> , オオカミ, ジャッカル
		Fennecus zerda <u>フェネック</u> <u>キツネ</u>
		Vulpes <u>キツネ</u>
	Felidae(ネコ科)	Acinonyx jubatus <u>チーター</u>
		Cara calcaracal <u>カラカル</u>
		Felis <u>ネコ</u>
		Panthera ライオン, <u>ヒョウ</u>
Hyracoidea(岩狸目)	Procaviidae(ハイラックス科)	Procavia capensis <u>ハイラックス</u>
Perissodactyla(ウマ科)	Equidae(ウマ科)	Equus <u>ロバ</u> , <u>ウマ</u> , <u>オナーゲル</u>
Artiodactyla(偶蹄目)		
<div> <div>Nonruminantia</div> <div>Tylopoda</div> <div>Ruminantia</div> <div>反芻偶蹄</div> </div>	Suidae(イノシシ科)	Sus scrofa <u>ブタ</u>
	Camelidae(ラクダ科)	Camelus dromedarius <u>ヒトコブラクダ</u>
	Cervidae(シカ科)	<u>アカジカ</u> , <u>ロージカ</u> , <u>ファージカ</u>
	Bovidae(ウシ科)	Addax nasomaculatus <u>アンテロープ</u>
		Bos taurus <u>ウシ</u>
		Capra <u>ヤギ</u> , <u>アイベックス</u>
		Gazella <u>ガゼル</u>
Lagomorpha(ウサギ科)	Leporidae(ウサギ科)	Oryx leucoryx <u>オリックス</u>
		Ovis <u>ヒツジ</u> , <u>ムフロン</u>
		Lepus capensis <u>ケープウサギ</u>
Rodentia(齧歯科)	Sciuridae(リス科)	Sciurus anomalus <u>リス</u>
	Hystriidae(ヤマアラシ科)	Hystrix indica <u>ヤマアラシ</u>
	Dipodidae(トビネズミ科)	トビネズミ
	Muscardinidae(ヤマネ科)	ヤマネ
	Spalacidae(モグラネズミ科)	Spalax leucondon <u>オオマダラネズミ</u>
	Muridae(ネズミ科)	マネズミ
	Cricetidae(ハムスター科)	ハムスターなど

たのかという問いについては、家畜化された動物種が、すべて草食性の有蹄類であるということとは注目に値する（中近東における哺乳類とそこでの家畜化された動物種の範囲の限定性を示す表1参照）。一般に肉食獣は、単独的な傾向をもち、大きな群をつくらない。それにたいして、草食性、とりわけ草原に適応した有蹄類のなかには、追従性をもって、大きな群を形成するものがある。そのために、集団的な追込み猟がおこなわれやすい中近東などの草原では、すでに狩猟段階でさえ、群居性をもつ有蹄類が、はるかに数多く獲得されている。有蹄類への関心は、家畜化以前にすでにあった。おまけに、いわゆる猫や犬のような単独で飼われるペット的な動物ならいざ知らず、食糧資源としての生業家畜となれば、等しい労働力で一挙に大きな群を飼養する方が、労働生産性が高く、好ましい。こうして、群居性の有蹄類が家畜化の対象となった理由は、ある程度、説明可能ではある。しかし、有蹄類のすべてが追従性をもち、大きな群を形成するとはかぎらない。有蹄類のなかには、種によっては、食生の幅が狭く、しかもさして多く群生していない草を食糧とするものもある。このような種はまず、体躯が小さいか、群サイズが小さい。それにたいして、より幅広い食性をもつもののほうが、大きな群を形成する傾向がみられる。こうして、管理者的視点からみた家畜適性というものも考慮しつつ、家畜化された動物種が、有蹄類のなかの特定種にかぎられてくる背景を、食性と行動特性とのあいだにみられる相関から論じたのは、ヤルマンであった（Jarman, 1974）。また、同じく動物の属性に注目して、人為的な拘束下におかれることに対する種に応じた耐性、また人と親和性をもちやすい性質の有無といったことを考慮した説明が、動物学者から提出されてもいる（Jewell, P.A., 1969, Blaxter et al., 1974）⁵⁾。

ただ、このような動物の側での家畜化されやすい条件がたとえ指摘されても、家畜化がそれでもって起こるというものではない。そこにはある時点での、人間の側からの特定の動機にもとづく介入がなければ、これら家畜化された動物も、野生状態のままに留まったはずである。そこで、2) いったいどのような動機でという、いわば人間の側での家畜化の背景が問題視された。そして、新石器時代にはいつからの気候変動、とりわけ乾燥化ということが指摘され、食糧危機から、より安定した動物資源の獲得のために家畜化が起こったといったことも論じられている。ただ、このような安定した食糧獲得の必要といった動機があろうとも、それでもって家畜化が実現するわけではない。

要は、動物学的事実として、管理しようとする人間にとって好ましい行動習性が、特定の動物種に認められようとも、また安定した食糧供給の要請といった人間の側の動機があろうとも、それらは潜在的な必要条件の指摘であるにすぎない。たとえ当の動物種に適合性が見いだされようとも、また人の側の動機として、安定した食糧供給への要請があろうとも、そこで、羊や山羊を家畜化させることになるきわめて具体的な人間の始動的な介入、そしてそれによって開始された人-羊・山羊間の固有なすり合わせの過程が、一連の歴史的出来事として起こらなけ

ればならない。ここに、3) 家畜化の時点で、人と当動物種間において、歴史的に実際に起こったインターアクションがいかなるものであったか、が明らかにされなければならない。こうして家畜化の起源問題で最終的になされなければならないことは、牧畜という革新的な生活技術の成立をもたらすことになった、人と羊・山羊とのあらたな関係性が成立する現場を、歴史的出来事として再構成する作業だ、ということとなる。

もちろんだからといって、このような過程を明らかにするための確実な資料は、記録文献のない時代、しかも道具を介さない介入によってひきおこされた出来事であるだけに、われわれの手元にさほど多くは残されてはいない。考古学者は、消費された残存動物遺骨の分析を通じて、考古学的な意味での家畜化の開始の時点をはぼ確定しただけでなく、のちに具体的に紹介するように、家畜化がなされた時代での人間の側の介入の一部を推測させるいくつかの事実を明らかにしてはいる。しかしそれらは、考古学的な意味での家畜化がなされて以後、家畜化へと向かう人間の始動的介入(x?)によって起こったいくつかの出来事連鎖が、骨に痕跡を残したかぎりでの部分的結果でしかない。こうして、このような家畜化の過程で、人と動物とのインターアクションとして起こった出来事を再構成するための歴史的過去の資料は、われわれの手元に十分に残されてはいない。

だが、このような消費された残存動物遺骨にのこされた考古学的な資料に加えて、この問題にアプローチする糸口が、他にまったくないわけではない。家畜化以後、牧畜という生活技術を身につけた牧民は、いまなお長い歴史的伝統技術を維持して、中近東・地中海地域をはじめとして、広い地域に分布している。もちろん、現在の牧民のあり方が、家畜化の時点で成立した牧民の家畜管理の技術をそのまま維持して、なんらそこに付け加えるものがなかったなどというのではない。ただ、現在でもなお季節的に移動しつつ、群を管理している、どの牧民を取り上げてよい。彼らが、当の家畜化された羊なり、山羊なりの群を身元において、それを管理している現場をみた人ならば、誰でも、少なくともつぎのような事実を見いだすはずである。

たとえば、朝キャンプ地周辺で夜を過ごした群に、あたかもせき立てるように声をかけ、立ち上がらせたあと、牧夫が先頭をきって歩きだすと、移動を開始し、群は彼のあとをつける。元来追従性のあるものが、先行するものの後をつけるのは当然である。しかしここでは、先行する仲間の後ではなく、人の後をつけているのである。果してこのようなことが、野生段階で起こりえただろうか。まずそのようなことは考えられない。家畜化以前の段階と比較したとき、そこにある種の人づけとでも言える、新たな人・家畜関係が成立していることを知らされる。

また夕方になって、帰路についた群がキャンプ地に近づいたとき、牧夫は、群を離れて、先にキャンプ地に戻るようなことも少なくない。いわば先導することをやめて、群を路上に放置することになるのだが、群はおのずとキャンプ地に戻ってくるのである。また、アフガニスタン北西部、バダクシャンの夏営地で、夜間放牧をするパシュトゥンの遊牧民は、明け方キャン

ブ地に連れ帰った群を、テントの周辺に放置したまま、昼を過ごさせている。危険の多い夜ならば、人臭いキャンプ地周辺で眠ることで、安全を図るということも考えられるのだが、まさに昼間である。にもかかわらず、まったく自由に放任している群は、キャンプ地の周辺で仮眠をしたり、ゆっくりと回遊をして、そこから離れようとはしない。われわれは、牧畜というと、すぐヨーロッパの牛や羊の牧畜を思い、放牧を終えて帰ってくる群が、牧柵を張り巡らされた囲いの中に追い込まれて、閉じ込められる光景をおもいうかべる。そして、群はまさに人為的な囲い込みのなかに入れられることによって、人につなぎ止められており、もしそのような囲いにいれないなら、群は、彼らの好むままに、人のキャンプ地からさまよいでてしまう、と考えがちである。しかし中近東の遊牧民のもとで放牧されている牛でも、羊でも、外敵の危険のない状況では、まったく夜営地で囲いこまれることもなく、夜を過ごすケースも決して少なくないのである⁶⁾。しかも牧夫の先導なしにも、おのずと人の居留地に戻ってくる。野生状態では、このようなことはまず想定不可能である。このようにみてくると、群は、人間の居留地に人為的強制によってつなぎ止められているというよりは、そのような物理的強制なしにも、みずから人間の居留地を自己の居留地にするものとなっている、ということになる。

また搾乳光景を見たものならば誰でも見ているはずである。家畜は、搾乳しようとする牧夫による身体接触をさして忌避しない。もちろん地中海地域の牧民は、搾乳時には、おおくのばあい柵に追い込んで、ひとつの出口へと追い立てることで、順番にでてくる個体を捕まえて、搾乳するため、彼らはすでに拘束状態にある。しかしイランやアフガニスタンの遊牧民は、乳雌を一頭ごと捕らえてきては、長く張られたロープの左右にしつらえられた小さいループに、その首をとおして固定して、搾乳する⁷⁾。そのために彼らは、乳雌を一頭ずつ捕らえては、たてがみや首をつかんで、繫留の場に引き立てる。もちろん、なかには捕まえられることを忌避して逃げ回るものもないわけではない。しかし、多くは容易に捕まえられて、そのひきたてに従容として応ずる。野生の場合、まずこのようなことは起こりえず、逃げ回り、身体接触を忌避するのが一般だ。このようにみてくると、搾乳の開始以前、家畜群はすでに、個体レベルでの人との親和性をもったものになっている、ということになる。

人—家畜関係は、たんなる人間の側からの強制的な介入によって維持されているのではない。柵に囲いこまなくとも、群は人の居留地にもどってくる。また、野生状態では許容しなかったような個体レベルでの身体接触を、かれらは許容するものになっている。最初の契機は、人間の側のなんらかの介入であったとしても、野生段階ではけっして許容しなかったはずの特定の介入を、動物の側が受け入れ、動物の側での行動習性上の変化が起こっている。そしてその変化が、さらに次の段階の人のあらたな介入を可能にする。たとえば搾乳にしても、個体レベルでの人の介入を許容するような親和性が成立してなければ、それは不可能だったわけである。このようにみてくると、家畜化というものは、人の側の一回だけの決定的な介入によって成立

するというより、人の初期的介入とそれへの動物の側の対応的な変化、そしてそれによって準備された次の介入の可能性の発見といった、発生順序をもった、相互的なすり合わせ的な出来事連鎖として記述されうることになる。

しかも、人間の側の管理的介入とその介入の許容とって、家畜化によって、これら家畜化された動物が、本来もっていた自発的行動習性のすべてを、人の管理に委ねているわけではない。かれらは、本来的にもっていた移動的な捕食習性は維持したままである。人はこのような行動習性は維持したまま、個体維持に必要な摂食活動、また群の再生維持にかかわる生殖・出産・育児にかかわる本来的な諸活動のある特定の項に、一連の慣習的、かつプログラムされた関与をおこなうことで、野生状態では見いだされなかった行動をする家畜を創り出している。しかももし牧民が、これらの家畜化された群に対する恒常的な介入を放棄し、このような創り出された人-動物関係系から彼らを解放すると、かれらはやがて再野生化して、われわれの接近を拒む存在に戻ってしまう。この再野生化という事実は、家畜化というものが、まさに介入と介入許容という相互的なすり合わせを通じて、一連の人為的技術行為の連鎖のなかに、当該の動物種の自発性を潜在的に維持させたまま、組み入れることである、ということを示唆している。しかも群が、人の居留地につなぎとめられたものとして行動し、そのメンバーが、接近や接触を許容するようなものとして行動するように、家畜群としての行動特性が、現在の牧畜技法のレパートリーとして、日々、そして季節ごとに繰り返されている介入によって、維持・再生産されていることを示唆しているのである。つまり、家畜化に関与的な介入技法は、現在の牧畜の技法の中にも潜在的に隠されていることになる。

おまけにわれわれは、他の事実として、半家畜化されているといわれているトナカイ群というものがあり、それへの人の介入の仕方や、その群の行動習性についての知識をもっている。それを、家畜群の行動習性と対照しつつ、しかも家畜群とトナカイ群への人の介入の差異を見比べることで、家畜を家畜たらしめているものが、いかなる人の介入によって成立しているのか、その糸口をつかむことも可能である。

このようにみえてくると、まさに先史時代に起こった、家畜化が進行した現場で発生した事態、そしてそれによってもたらされた人-当該動物間関係における変化という、文献資料にたよることのできない歴史的出来事過程の再構成という試みも、その糸口が皆無だということではなく、いくつかの対照資料を通じて、ある程度は可能だということになる。というわけで、これらの対照資料を参照しつつ、考古学的な意味での家畜化がもっとも最初に達成されたことになっている羊・山羊の家畜化にかんして、それがいかにして達成されたのか。そこで起こった新たな歴史的出来事を再構成する。本稿はこのような作業を、ひとつの試みとして行うことを目的としている。

もちろんその作業を行なうにあたって、うえにあげたような再野生化群やトナカイ群に關す

る知見をもふくめた参照可能な資料のうち、考古学的事実は、たとえそれが骨における痕跡といういかにも間接的なものであろうとも、家畜化が起こった時点で起こった出来事の一部を、遠い過去から伝える事実的証拠資料である。その点で、まずそれがいかなるものであったか、またそれが含意するところのものはいかなることかを、最初に示しておくことべきであろう。そこでこれまで動物考古学者が、住居跡から出土した動物の残存消費遺骨の存在様態からあきらかにした事実を、まずここで紹介しておこう。

- 1) かって一九六七年一二月から翌年三月まで、リヴィアのフェザンのベルベル族、メガルハ・クランに属するラクダ遊牧民を調査したさい、数十頭のラクダをつれてキャンプ地から数週間の放牧に出ている牧夫に出会ったことがある。かれは、一本の杖と、搾乳の桶と、食糧としての乾燥したナツメ椰子を入れたずだ袋、そして夜営のためのブランケットをもっているだけであった。彼はテントさえももっていなかった。またのちに示すが、アフガニスタン東北部シェワ高原に夏期放牧にゆくパシュトン系の遊牧民は、追込み用の柵は用いない。群を追込み柵に入れて夜を過ごさせることは必ずしもこの地域では一般的ではない。
- 2) インドのグジャール系のバックルワラは、毎年ジャムーの冬营地から出発して、羊・山羊を連れて、カシミールの山地部に夏期放牧にやってくる。その一団の移動に、夏营地からさほど遠くないパハルガム (Pahalgam) から、随行したことがあり、朝起床して、食事を済ませてから出発までの時間を測ったことがある。早いときは、3-40分で出発する時もあった。緊急時の出発は、旧約聖書の出エジプト記での、急ぎの出達の状況をほうふつとさせるものがある。
- 3) もちろんこう言っているからといって、考古学者として出発した彼が、先史時代の生活について考えるさいに手がかりとなる考古学的残存資料、つまり残された人工的な物質文化的資料を軽視したということではない。いやむしろかれは、物質文化的な残存資料それ自体を、子細に吟味した。ただ、形式的な図柄や住居跡の形態的比較をもって、時代区分や、文化領域の区分を行うことで満足する考古学者を超えて、まさに知的に行為する人間主体の精神の進化史を再構成することを目指した、卓越した考古学者、いや真の意味での人類学者であった。『身振りことば』は、そのような彼の知的態度によって書かれた記念碑的な精神の進化史であったとさえいいうる。
- 4) 牧畜というものが、なにかんづく動物に対する、道具を介さない、人間的行為の産物であるということはJ・P・ディガールによって、強調されている (Digard, J.P., 1990: 201以下)。
- 5) ガゼルや他の多くのアンテロープ類は、テリトリーでの縄張り性がきわめてつよく、摂食行動中には分散し、個体間距離は拡大する。そのために家畜群のように相互的に接近したかたちでの放牧はまず不可能である。それに対して、羊、とりわけ山羊の摂食行動中の個体間距離はじつにフレキシブルであり、テリトリーについても排他性が弱い。そのために、柵に入れられても問題はない (Geist, V., 1971, and Jewell, P.A. et al., 1974., Clutton-Brock, J., 1978: 50.)
- 6) アフガニスタンの東北部、バダクシャンのシェワ高原には、夏の一時期を夏营地としてすごすためにパシュトン、ウズベック、そしてアラブ系の遊牧民、そして山地タジック系のシャグニの移牧民が群を連れてやってくる。このうちシャグナンの移牧民は、シェワ湖の北東、アム川にパンジュ川が合流する地点にある有畜農村の住民である。かれらはこの村の農民所有の羊・山羊を集めて、夏期の委託放牧をするもので、かれらはこの夏营地で、石造りの固定住居を築き、その前に石垣の囲いをつくって、そこに群を追い込んで、夜を過ごさせている。それに対して前三者は、遊牧民であり、テントないしパオ型の移動式住居の周辺で、放牧を終えた後の群を、なんら囲い込むこ

となく、放置している。遊牧系の前三者が、群をまったく囲い込むことをしないのに対して、農耕的傾斜の強いシャグニが囲い込むという対照は、興味深い。イランのパクチアリは、冬営地では、群をなんらかの囲い込みに追い込んでいるが、夏営する山地では、やはり囲い込まずに、テントの周辺でたむろすに委せている。インドの西部、ラジャスタンでも、遊牧系の羊飼養者は、けっして群を囲い込むことはない。またカシミールのバッカルワラ、そしてカシミリも同様である。群を、木柵や石造りの囲いにいれて夜を過ごさせる傾向は、ヒマラヤなどの山地部、そして西は、地中海地域からヨーロッパに向かうとともに一般化し、ギリシャのきわめて牧民的性格の強いサラカッチャニも、木柵に群を追いつめて夜を過ごさせている。ただルーマニア北部、ピストリッツァ県のシエウツ（Sieuț）やアルダン（Arđan）村の移牧専門の牧夫は、山地の夏営地では、群をいれる頑丈な牧柵をつくって、群をそこに入れるのに対して、より低地の村近傍の放牧地で、秋の放牧を行うときには、まったく柵も作らずに、野営する焚火の近くに群を集めて夜を過ごさせる。このルーマニアでの事例で、夏営地で木柵をつくるのには、狼の襲撃に対する防御目的がつよく、低地の秋営地で、その心配がない場合には、囲い込みをしないということであった。家畜群が、囲いによって、人間のもとにつなぎ止められているのでないことは、これらの事例からも知られることであって、牧民自身、このことはよく知っていることと見なしてよい。

遊牧系のバシュトゥンなどが囲い込まずに群を放置している同じシェワ高原で、農民的な傾斜の強いシャグニがなぜ囲い込みをするのか。この点については、有畜農村で家畜を飼うときには、農地を荒すという問題が生じ、このことが関与しているのかも知れないと思っている。パクチアリも、農地のない夏営地では、いっさい群を囲わないのに対して、冬営地では囲い込むし、その周辺にある麦の畑も、必ず石垣で囲い込まれている。家畜のための囲い込みは、群が逃げ出すという心配からというよりも、ひとつは外敵に対する防御、そしてもうひとつは周辺の農地への被害という問題から考えるべきであり、家畜群は囲い込みなしにも、人づけされていると考えるのが、事実在即しているというべきだろう。

- 7) 搾乳に際して、乳雌をロープにつなぎ止める方法は、東はアフガニスタンから、西はトルコ、また北は中央アジアにまで広がっている。それよりも以西は、一部に開口部がある木柵や石垣に群を追いつめ、中に子供を入れて、その出口へと羊・山羊を追いつ立てて、そこから出てくる個体を、その開口部の外で待ちかまえている牧夫がとらえては、乳を搾るという方式が一般的である。もちろんこのような一斉に乳雌群全体を集中的に搾乳する時以外、必要に応じて一頭だけを搾乳するようなこともある。このようなとき、帰幕してしゃがみ込んでいるもののなかから、特定のものを捕らえて、おもむろに乳を搾るわけだが、一旦捕らえられて乳を搾られはじめるや、牧夫のいうなりになって、もはや暴れて逃げようなどとはしない。個体レベルでの牧夫との親和性は、搾乳以前にほぼ成立しているといわねばならない。

II 消費動物遺骨が示す＜新たな出来事＞

動物考古学者が、羊・山羊などの残存消費遺骨の存在様態から、それらが、紀元前8000年紀末に、ある決定的な家畜化の段階に入ったと判断した根拠には、いくつかの側面からの事実がある。いまそれを、ベケニーが整理している指標（Bökönyi, S., 1969.）にそって示すならば、次のようなことになる。

1) まず家畜化のメルクマールのひとつとして、残存遺骨の形態的变化と言うものが考慮される。動物の身体サイズは、遺伝的交流の範囲を狭めて、インブリーディングを繰り返すと、一次的に縮小する。これは、生殖的隔離がもたらす効果のひとつとして、動物学の領域で明らかにされているひとつの事実である (Jarman, M.R. & Wilkinson, P.F., 1972, pp.83-96. 野沢, 一九八七, 93頁)。ところで、それぞれ時代を異にする層から出土する羊・山羊個体の残存遺骨の特定部分 (距骨=astragalus など) のサイズを、時代毎にドットして、そのサイズの変位幅、および平均サイズを比較してみると、紀元前8000年紀後半以降、そのサイズ変位幅が急に増大するだけでなく、全体的にそれまでよりも小さいサイズへと平均が移動している (Bosseneck, J. and A. von Driesch, 1978, Uerpmann, H.P. 1978.)。また、身体サイズとは別個に、角がわい小化するという傾向も認められる。考古学者はまず、この事実に注目し、そこに、遺伝子交流が限定された、つまり隔離され、孤立した群の成立を推論するのである。もちろんこのような事実から示唆される、身体サイズのわい小化の原因として、この遺伝子隔離以外にも、制限された放牧地や、囲われた柵内といった、限られた人的環境下で、多数の個体を飼養することによる栄養条件の低下も考慮されねばならない (Clutton-Brock, J., 1978, pp.50, Meadow, R.H., 1989, p.86.)。たゞいづれにしても、野生段階では、このような生殖過程での遺伝子隔離は起こらないし、過剰な人工密度の増加もおこらない。こうして、遺伝子交流の範囲が限定され、しかも限られた範囲内で多くの個体数が生息する状況を考えるならば、家畜群として、特定の牧民によって所有され、管理された群を想定する以外にない。こうして、サイズの縮小といった、形態変化をおこした個体が増加するという考古学的事実から、野生群から狩られたものの消費と並行して、自然的な生活域から切り離されて管理された家畜群からの消費、つまり管理された家畜群の成立を読み取るわけである。

ところで、ナチュラルな生殖パターンをうしなうことで、遺伝子交流の範囲の限定を受けた人為的に管理された群の出現とともに、人は、それらの群を、本来の生活域から離れた場所に連行して飼養することができるようになる。もしここで、それまでまったく野生種が生息してなく、結果として先行する時代層で、羊なり、山羊なり、当該種の消費遺骨がまったく見いだされない地域の住居跡で、ある時代以降、形態変化を起こした、サイズのわい小化した遺骨が現れ始めるという事例がみとめられるならば、それは、それまで野生種が生息していなかった地域に、当該種が家畜としてもたらされて飼養され、消費されたことを推論させる。こうして、家畜化の指標として、

2) すくなくとも旧石器時代以降、なんら祖先野生種が存在が認められない (従ってその消費遺骨が出土しない) とところで、のちに家畜化される種の消費遺骨が、ある時代層以後多く出土するならば、それは人為的に移植されて飼養された家畜個体の消費遺骨である。このような推論が可能になる。いいかえれば、人によって、本来の生活域から引き離されて、人為的に移

植させられた群がすでに存在していたことを示唆する。もちろん、この種の事実は、すでに家畜化が行われた他の地域から、家畜としての当動物種が、あらたにその時代に、当該の地にもたらされたことを示すだけなのだから、それ以前に、どこで家畜化が始められたかを示唆する材料にはならない。しかし、どこで起こったかはいざ知らず、それ以前にどこかで家畜化が起こったことを示す以上、この時代よりすくなくとも以前であるという、家畜化の時期の下限を判断する材料になる。また事後的な伝播域の拡大方向をみることで、逆に伝播中心を策定する材料にもなりうる。

3) もし消費される対象群が、おもに人の管理下におかれた群からのものであれば、人は、野生群を狩ることで消費していた段階とは異なったかたちで、群の個体を、年齢におうじて、計画的に消費することが可能になる。もちろん狩猟段階でも、狩猟民が、いずれの年齢層のものをも、ランダムに、したがって野生群を構成する個体の年齢に応じたポピュレーション分布どおりに、狩猟するわけではない。たとえば、子を生む雌はできるだけ狩らないといった、選択的狩猟というものがある。また幼児段階のものは捕獲が容易であるために、幼いものを捕獲する割合は高くなるということがある。それに対して、管理群では、幼児はある一定の肥育期間を経て、屠殺されることになり、自然狩猟段階で狩られる幼児頭数よりも、幼児の消費頭数は減少するということが考えられる。また、高年齢のものについていえば、狩猟段階では、幸い途中で狩られることを免れて、高年齢に達したものが、ついに狩られるということもあって、高年齢の遺骨が出土することがある。それに対して、管理群では、成長段階を終えた高年齢個体では、草の消費と肉量の増加比の低下が生じ、経済的配慮から、ある年齢以上は保持せず、一定年齢に達するとともに、計画的に屠殺されることが考えられる。こうして、高年齢のものが消費された動物遺骨として残る可能性が減少することになる。もしこのような、個体の年齢に応じた消費頭数分布での変化が認められるならば、そのような移行の時点で、狩猟の略奪から、管理をうけた群での計画的消費への移行が起こったと解釈できる。いまここでその移行をしめす資料を具体的には示さないが、動物考古学者は、ある時期から、消費される幼児個体の頭数の著しい減少が起こっているだけでなく、ある一定年齢以上の消費個体例がほとんど皆無になることを示すデータを提示している(たとえば Ducos, P., 1978, p. 54 をみよ)。

4) 家畜群として管理されるとともに、牡雌で、年齢に応じた消費個体の頭数分布が、きわめて特徴的なカーブを示すようになる。つまり、若年層で牡が多く、高年層では雌が増加する。というのも、雌は、次世代の子を生み、家畜資源の維持、増大という点で、子を生むかぎり、消費することは控えられる。それに対して、牡は、種付けのために重要ではあるにしても、多くの雌に種付けをすることが可能であるために、多くを種付け牡として残す必要はない。しかも年齢に応じた肉量の増加は、若い成長段階では期待されるにしても、それ以後は期待できない。牡は徒食者となるために、若くして屠殺して消費の方が経済的に有利とみなされて、こ

の段階で間引きの対象となる。事実多くの牧民のもとでは、このような経営戦略が一般的である。もし消費される個体の牡・雌に関して、このような年齢に応じた被屠殺個体頭数の分布が認められるならば、そこに、家畜群管理者の消費戦略の証拠、ひいては群の家畜化の事実を推論できるというものである。もちろんこの指標に関しては、残存遺骨の性差の判別が容易ではないこと、しかも狩猟段階で、すでに性に応じた選別狩猟と言うことも確認できるので、現在の段階では、あまり有効な判別基準としては用いられていない。

動物考古学者は、こうして、家畜化の過程でのある画期的な出来事の開始を間接的に示唆する、新石器時代の残存動物遺骨の存在様態の主要な四つの指標をもとに、長期の時間的深度をもち、かつ広範囲なデーターを比較照合しつつ、羊・山羊がほぼ紀元前8000年紀末に、そして牛が6000年紀、そして馬やラクダがそれ以後に家畜化されたことを明らかにしたのである。

ところでここでも、これら動物考古学者が残存遺骨から読み取った出来事を、これまでそうやってきたように、「考古学的な意味での家畜化の開始」と呼ぶことにして、そこで考古学的にみたときに、たしかに起こったと考えられる、考古学的に推論可能な〈新たな出来事〉を要約するなら、次のようなことになるだろう。

まず1)、2)の事実は、

I) この時代に、いまや野生群から人為的隔離させられ、人的管理を受けた状況下で、それまで開かれていた遺伝子交流の回路が閉ざされて、自己再生産群が成立していること、そしてまさにそのことによって、他の地域に人為的に移植させられるような群が成立しているということである。

また3)、4)の事実は、

II) 群の管理者が、牡・雌それぞれの個体にたいし、性や年齢に応じた管理と消費を行っていることを示唆し、そのような個体に応じた選択的な間引きを行ないえていることから、管理者が、個体識別はもちろんのこと、出生時期から起算した年齢をも考慮して管理しているということである。

前者は、なんらかの新たな人の介入によってもたらされた、群自体の行動習性上の変化をふくめた、他群への移動・混入の可能性の低下、群としての独立性ないし孤立性についての言及である。そして後者は、そのような家畜化が実現された状況下で、群を管理する人が、あらたに採用する（あるいは新たに採用しうる）ことになった対象認知と対象処理の様態についての言及である。

さて、ここでうえにあげたような新たに成立した家畜群の孤立性や、群管理者の対象認知（個体毎の年齢識別）や対象処理（年齢に応じた間引き）の様態が、現在の牧民のよとの管理群や牧夫についても連続して見いだせるかどうかを見ておくことは、家畜化の時点における介入がいかなるものかを割り出すためにも意味がある。つぎにこの点を吟味しておこう。

Ⅲ 現在の管理群における連続性

まず、Ⅰ) 遺伝子交流の自己閉鎖性、ひいては他群への移動・混入が抑制された、群としての独立性ないし孤立性の形成という事項に関して。

牧夫が、きわめてわずかの種牡をもって、自己の管理群の数百頭の雌に種付けを行っていることは、いずこの牧民のもとでもみとめられる一般的事実である。ケースにおうじて差異はあるにしても、種牡一頭にたいする、交尾対象となる成雌の頭数比が、一：一〇～二〇という事例はけっして少なくない。かれらは極度のインブリーディングを回避するために、時に外から種牡を購入したり、交換することはある。しかし、遺伝子交流レベルでの管理群の孤立性は、まず、この数少ない種牡による多くの雌への種付けによって、等しい遺伝子をわけもった雌による大量の子の再生産が繰り返されることによってたかめられている。

ただ、管理群としての孤立性は、このような人為的な生殖管理だけでなく、野生群や、半野生群ではしばしば見られる他群への移動・混入が起りにくいという、群それ自体の行動特性の変化によっても促進されている。いまそれを群のメンバーの群への帰属性形成ないし他群に対する自群の輪郭形成と言うことにして、それが現在の家畜群において認められることを、ここでいくつかの事例をあげて示しておこう。

まず筆者の、アフガニスタンでの観察であるが、バダクシャン東部のシェワ高原には、パシュトンの牧民が夏期放牧をおこなうために集まってくる。左右に尾根を見上げる谷あいの川べりに、一定の距離を保って、数家族の牧民が相互にかたまりあって、テントを立てて過ごすことになる。ところがかれらは、夏のあいだは夜間放牧をするために、群は、朝、テント地に戻ってきて、夕刻までそこに留まることになる。ところがかれらは、それらの群を、なんらかの柵にいれるようなことはけっしてしない。そのために、いくつかの群が、それぞれ陽ざしのもとでかたまりあって昼寝をしたり、草をはみながら回遊する光景が見られる。もちろんときにこれらの群は相互に近づきあうこともある。にもかかわらず、それらは、けっして交じりあうことはない¹⁾。

またおなじくアフガニスタンのカーブルの南、ロガール県バラキ近傍で、パシュトンの複数の放牧群が、ほとんど同時に前後してカーレーズ連行され、水を飲む機会を与えられ、ついで周辺で休憩するときの様子を観察したことがある。もちろん、水を飲むべく連行された羊達は、チャナルの流れに沿って並び、水を順次飲むことになるため、一定時間がかかる。ところが、時をおかず別群が、後からつれてこられるために、先行群と混じり合って、水を飲むということが起こり、そこに異なる管理群が入り交じった状態が発生する。ところが水を飲み終えたと、かれらは、牧夫の軽い指示に促されて、周辺の休憩地にたむろして、座り込むことになるのだが、このようなとき、水場で混じり合った二群の成員が、混じり合うようなことは、ま

ず起こらない。それぞれの個体は、牧夫によって誘導されるまでもなく、みずから、自分の群がどこに向かうかを見分けて、それぞれの休憩地に座り込むのである²⁾。

太田はかつて、東アフリカのツルカナが管理している山羊の家畜群において、たとえば、ある牧夫aによって恒常的に管理されている群Faと、他の牧夫bによって恒常的に管理されている群Fbとが、放牧中近接して、交差して混じり合うことが起こったときの状況を観察している。このような状況で、もし群の成員に、ある種の帰属意識とでもいえるものがなければ、両群の成員は、入り交じって、簡単に分離することはないはずである。たとえば、極北の半家畜化された状況にあるトナカイの群では、実際にこのようなことは起こる、つまり、二群の接触によって、他群に、自己の群の成員が紛れ込んでしまうといったことが起こり、群所有者間の争いの種になることが、しばしば報告されている(葛野, 一九九〇, 鄭, 一九九二, 二五頁)。ところが太田が観察したツルカナの家畜群では、二群が交差して入り交じることが起こっても、牧夫のわずかな差配にうながされて、すぐにそれぞれの群に属する個体は、自己の属する群メンバーの移動方向にあわせて移動して、きれいに二群分離して、本来のそれぞれの群としてのまとまりを回復するというのである(太田, 一九八二, 四〇頁以下)。

また同様の観察は、サンプルゥの山羊群に関して、鹿野がおこなっている(Shikano, K., 1989.)。

もちろん、いかなるケースでも、このような分離が完全に行われているわけではなく、ときに混入が起こることもあることをわれわれは知っている³⁾。しかし上の観察事例にしめされるように、自己の帰属する群がいずれであるのかを弁別して、もとの群に戻るといった、鹿野の言葉を使うなら帰属群なりの行動(group oriented behavior, Cf., Shikano, K., 1989, p.66.)をおこなうようになっている。つまり、メンバーの群帰属性、そしてこの帰属性にもとづく、被管理群なりの輪郭が生まれているということになる。

さきに、半家畜化されたトナカイの群では、所有群間の接触による、混じり合いが起こると言っておいた。いやそれだけでなく、野生の牡との交尾さえ起こりうるとさえ言われている。そこでは、群としての輪郭が外に対して不明なものである。それに対して、上の事例からもうかがえるように、家畜化された群では、このような移動や混入が起こりにくい。いったいこのような群としての輪郭、また個体の群帰属性の成立は、どのような管理的介入の結果として起こったのか。このこと自身その原因が問われなければならない。ただこの問いへの解答は後に示すことにして、おそらく、極北の半家畜化状態にあるトナカイへの管理的介入では欠如し、中近東の牧夫の家畜群への介入において認められる〈なにものか?〉によって、それが引き起こされているに違いないということだけを、ここでは指摘しておく。

そして当座は、考古学的家畜化の時点だけでなく、現在の家畜群にかんしても認められるという点で、現代的連続性といえる側面を要約しておこう。それは、現在の家畜群でも、群それ

それに応じて、他群との遺伝子交流が自然に起こらないような群としての自己閉鎖性が創り出されているということである。しかも、その群としての自己閉鎖性が、たんに種付けの管理や、群の行動管理といった人為的な管理強制によってのみ達成されているのではなく、メンバーの群帰属性、そして被管理群としての輪郭形成といった群自体の行動習性上の変化によっても促進されているということである。考古学的な意味での家畜化の時点で、この群としての自己閉鎖性が成立していることは、身体サイズのわい小化という事実から想定されていた。そして、この群としての自己閉鎖性が、現在の家畜群でも連続して認められるとするなら、その閉鎖性をもたらしている介入が、現在の家畜群への介入の中に隠されているということになる。

ついで、Ⅱ) 個体毎の年齢記憶にもとづく計画的な間引きということに必要な、群管理者の個体識別と年齢記憶の能力に関して。

一般的に言って、それらは、およそ群を放牧管理するいづこの牧民のもとでもみとめられると言ってよいだろう。

まず個体識別に関して、すくなくともこれまで訪れたいづこの牧民も、かれらは、次のような二つの弁別基準をもって、自己の管理下にある群のそれぞれの個体を特定している。そのひとつの基準は、各個体の身体特徴である。かれらは、これらの身体特徴を、体毛の色、斑点の形態、そしてその位置の組（たとえば＜体毛の地は白、黒い斑点が眼のまわりを囲んでいるもの＞＜体毛の地は白、頭は黒いが、口の周りが白いもの＞などなど）として分類し、その組にあてた名称群からなる分類上の参照枠に照らして、まず個体を識別している⁴⁾。もうひとつは、ある特定個体が、どの母親のなん番目の子であるのかという母子関係上の順位である。もちろんこの後者、ある個体がどの母親のなん番目の子であるのかと言う記憶は、それぞれの個体の身体特徴記憶が基礎になっていることは言うまでもない。こうしてかれらは、「この目の周囲に黒い斑点がある若は、等しく目黒の斑点をもつこの母親の二番目の子である」と言った関係を、特に言葉にだして憶えているわけではないのだが、一方を指定されれば、ただちに他方を想定できるようになっている。事実、筆者は、「この母雌の二番目の子を指示して欲しい」といった要求をしたことがあるが、かれらはたちどころにそれを指示した⁵⁾。それは学校の担任教師が、しかじかの子を見つけてきてほしいといわれて、すぐその子についてのイメージをもとに、群がる子ども達の中から、一人を容易に特定できる能力に似ている。こうして彼らは、身体特徴についての子細な注目にもとづいた個体記憶と、そのそれぞれがとる母子系列での位置についての正確な記憶とで、各個体の年齢を、誤りなく割り出すことができるようになっていく。

ところで、もし年齢の同定にさいして反射的に参照される、このような身体特徴および母子系列にかんする記憶が、単に年齢に応じた計画的な間引きや消費戦略という、経済的動機だけに促されたものであるとしたら、それは遠い先に到来する必要にうながされて、いかにもまぎ

らしい弁別上の記憶を行なっていることになる。はたしてかれらは、2-300頭もの群の一头一頭の個体特徴とその年齢についての記憶を、もっぱらこのような計画的消費戦略のためにおこなっているのだろうか。筆者にはそのようには思えない。むしろそれは、間引きなどということがあるはるか以前、その個体が生まれて以後ただちに開始される、母子間の授乳・哺乳関係への注目と人為的介助という、慣習化され、毎日行なわれる介入の過程で、管理に必要な記憶として脳に刻み込んでいると考えたい。

すくなくとも具体的に、牧民が、子の出生以後、それぞれの実母・実子関係にいかに関入しているかを観察したことがある人ならば、いずこの牧民のもとでも、そのようなことを証拠づける出来事が起こっているのを見とどけているはずである。放牧にだされた母雌群が、放牧地からかえったあと、牧夫は、キャンプ地にとどめおいていた新生児の群を、母群に近づけて、哺乳の機会をあたえる。そのようなとき、実母と実子は相互になき交わしながら、相手を見つけあい、授乳・哺乳関係を成立させる。ところが、ときにうまく相手を見つけ出せないこともあり、授乳を忌避する母雌もいて、いつもそれがうまく成立するとはかぎらない。いうまでもなく哺乳の不成功は、当の新生児の成長、さらにはその生命にかかわる。牧夫は、このような事態が起こることを避けるべく、まずこのような状況下で、全体を監視する。そして実母を見つけ出せない新生児を見いだすと、それを拾い上げ、小脇にかかえて、実母のもとに連れてゆき、その腹の下に押し込む。まさにそれは、授乳・哺乳関係成立のための介助行動と呼ぶことができ、放牧を終えて、キャンプ地周辺の平地に座り込んだ母雌群のなかで、新生児を小脇に抱えて、実母を探しだそうと周囲を見渡している牧夫のすがたは、印象的でさえある⁶⁾。しかも、この授乳・哺乳関係成立のための介助行動は、離乳期の到来とともに終わるとはかぎらない。筆者は、イタリア中部山村での夏期放牧状況で、遅れて出産した子や、成長の悪い当歳子のために、搾乳後の残り乳を与えるべく、わざわざその当歳子を抱きかかえ、実母を探し、その腹の下に子を押し込む介助行動を、なおも毎日行っているのを観察している(谷、一九七七、一四頁以下)⁷⁾。

それにしても、いったいなぜこのようなことをしなくてはならないのか。少なくとも家畜化以前の自然状態では、このような人間の授乳・哺乳介助などなしに、母子はスムーズに授乳・哺乳を行っていたはずである。もしこのような自然状態での母子の愛情にもとづいた授乳・哺乳関係が、家畜群でも持続されているなら、このようなお節介とも言える介助は不必要なはずである。ところがそれが必要になる。いったいどうしてこのような本来不必要であった介入が必要になったのか。それはそれなりに考察されるべき問題である。ただそれへの解答はここではさておくとして、少なくとも現在の家畜群管理において、このような授乳・哺乳関係成立のための介助行動が慣習的な介入行動としてみとめられる、ということだけに注目する。そして、このようなときに牧夫が行わなくてはならないことはなにか、を考えてみよう。それは、まさ

に出生時の時点で、どの新生児が、どの母雌の実子であるのかという、個体識別にもとづいた実母・実子関係のペアについての確実な記憶を、頭に刻み込むことである。そして、毎日繰り返される授乳状況下で、必要とあれば授乳・哺乳関係成立のために介助をするという要請のもとで、この関係づけの記憶を、長期記憶として脳に固定することである。「この母雌のなん番目の子を指示してくれ」という要請に、牧夫が直ちに応えうるのは、まさに当の個体が生まれて間もない時期に、このような授乳・哺乳関係への介助を行なっているからだということになる。

それぞれの個体の身体特徴、そして母子系列での位置といった、のちに年齢に応じた間引きが可能になるための個体ごとの識別情報は、こうして、出産時にはじまり、その後毎日繰り返される授乳・哺乳関係成立のための監視・介助行動をつうじて、すでに管理者である牧夫にとっての長期記憶として維持されている。現在の牧民達が、個体を識別し、その年齢を確実に割り出せることで、計画的に年齢に応じた、消費戦略を実現できている背景に、うえにのべたような、子の確実な成長を期待した、出産以後の授乳・哺乳場面での実母・実子のペアリングへの注意深い監視と、必要に応じてなされる介助行動というものがある、というわけである。

さて、以上で筆者は、まず、動物考古学者が、考古学的な意味での家畜化の開始時期を確定するにさいして、新たに出現したと考えられる、次の出来事、

I) なんらかの人為的介入によって、人づけされ、いまや群相互間の移動が抑制された（結果として遺伝子上の隔離が起こった）、いわば外に対して閉じた、輪郭のある集団の成立と、他の地域への人為的移植可能性、

II) 年齢におうじた計画的な間引きを行いうるような、個体識別が可能で、それぞれの個体年齢を記憶しうるような群管理者の出現、

に注目して、そのようなことが、現在の牧民のもとでも認められるかどうかを検討した。そしてその答えは肯定的で、いまや、残存動物遺骨の存在様態から推測した二つの新たな出来事、つまり人づけされることで発生した、外に対して閉じた、輪郭のある被管理群、そして群管理者の対象個体を年齢と共に識別しうる能力というものが、少なくとも現在の牧民が管理する群、そしてそれを管理する牧夫においても確認できるということを知ったのである。

さてここで、われわれは、現在の管理された家畜群で、もし牧民達が日々、また毎年季節的に放牧の現場で繰り返している、慣習化された一連の技術的介入をやめて、放置するならば、一旦人につなぎ止められている群も、人の手元を離れ、再野生化して、もはや人為的介入を許容しない群に戻るということをいま知っている。いやそれだけでなく、家畜群ではみとめられない社会行動上の習性をとりもどす。とするなら、人為的介入下の群のあり方と、人為的介入を取り除いたときの再野生化群のあり方との差異を見比べることで、人為的介入下の被管理群で認められる家畜群としての行動習性が発生するのに関与的な介入を特定する手がかりをう

ることができる。

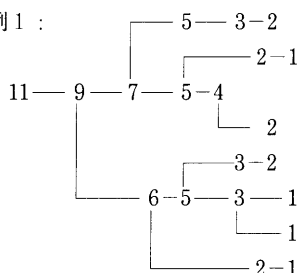
しかも、考古学的な家畜化の時点で起こった〈新しい出来事〉 I) にかかわることだが、考古学的家畜化の時点で発生した家畜群が、現在の家畜群と同様、群間の移動・混入が起これにくいのに対して、すでに指摘しておいたように、半家畜化の状態にある極北のトナカイ群では、群相互間での混交がしばしば起こるだけでなく、野生の牡との交尾さえもが起こるということを、われわれは教えられている。とすれば、このトナカイ管理技法のレパトリーの中には見いだせず、現在の家畜群では認められる介入技法のうちに、外に対して閉じた、輪郭のある群の成立を招来した原因が潜んでいることになる。われわれはこうして、実験条件をさまざまに変えることで発生する変化を見比べることで、どのような条件が、どのような結果に因与的であるかを同定しうるのに似て、三つの異なる条件下にある群のそれぞれの行動上の差異を比較対照することで、考古学的な意味での家畜化の時点において確認される〈新たな出来事〉を招来した介入、いや介入そのものとはいわなくとも、それがもたらした新たな事態をつきとめうることになる。というわけで、これから、これらの比較資料を検討することによって、いわゆる考古学的な意味での家畜化の時点で確認される骨が語る〈新たな出来事〉を招来した〈新たな事態〉の推定に向かうことにしたい。

- 1) この観察は、一九七八年七月一〇日よりほぼ一カ月間にわたって、シェワ高原に滞在して、バシュトゥン（カンダハリ系）、ウズベック、アラブ遊牧民、そして山地タジック（シャグニ）移牧民を調査したときのものである。かれらの群経営に関しては Tani, Y., Matui, T. & Omar, S., 1980 および松井、一九八〇をみよ。
- 2) この観察は、一九七七年七月末、アフガニスタン・ロガール県バラキ（Baraki）に近いカライ・ワジール・クシ（Karai Wazir Khushi）村の外で行ったものである。カレズによって引かれた水が、この地点で地表に出て、幅一メートルあまりの水流をつくっている。牧夫は定期的にこの泉に群を連れてくる。この時は三群があい前後して連れてこられたが、一群は一二〇頭からなるおもに白い色をした羊からなり、他はそれぞれ六〇頭余りで、黒ないし、灰色の羊からなっていた。かれらは、なかに牡の山羊を入れており、羊六〇頭からなる群に五頭の山羊が混入されていて、この山羊が群の先導をする傾向がみられた。種牡は、雌五〇に対して一頭の割合で入れるが、種付けが始まる秋までは隔離している。水を飲んだあと、それぞれの群は、放っておいても、べつべつのいつも決まった場所に行きつて昼寝をする。牧夫もこのことは知っており、二群が水飲み場で相互にまじりあって、まれに他群へ混入する個体があるときでも、けしかけるとすぐ、自群にもどることであった。ちなみにこの群は、三月にこの地域にやってきて、八月二三日にジャララバード、そしてパキスタン方面の冬営地に向けて移動させられるとのことであった。
- 3) もちろんいかなるケースでも家畜群では、混交の可能性がないと言うのではない。たとえば、イタリア中部、アブルッツォ山村（チェルクエト＝Cerqueto）で、移牧の牧夫が管理している群で、二群が接近して、牧夫は混入が起こることを回避しようとすべく躍起になっていたのを観察している（谷、一九七六、一二三頁以下）。幸運にも両者は混じりあうことなく遠ざけられたが、この場合は、同じ所有者に属する当歳児群と母雌群との接近のケースであり、このような場合は容易に混

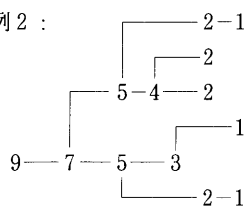
入が起これると見なされて、牧夫は慌てたと考えられる。もちろんこのようなケースでなく、さきのアフガニスタンのバシュトゥンの遊牧民のもとで、相互に別個の管理群間でときに他群への移出・混入が起これることがあると聞いている。ただその度合は、半家畜化状態にあるトナカイ群よりもはるかに少ないと考えられる。さもなければ、太田が観察したようなことは起これるはずがないし、アフガニスタンの水のみ場でのようなことは起これらない。

- 4) トルコのユルックに関しては松原、一九八三、四二頁以下、ルーマニアの事例については、Telcianu, 1979. および Tani, Y., 1980, 82-83 に詳細が示してある。
- 5) ルーマニア北東部、ピストリツァ県アルダン村の移牧専門牧夫に、自己の所有している群をまえにして、ある特定の母子系列にかんして、その年齢および関係を指示するように求めたことがある(一九七八年一〇月)。そのときの解答事例をここに示しておく。かれは、「この母雌の子はどれか」、「この母雌の妹はどれか」という問いかけに対して、即座にそれを指示し、その年齢を答えてくれた。同一の母雌から生まれた子の出生順序を直ちに指摘できるだけでなく、世代深度をさかのぼった関係性までも、かれらは再構成できることがこれから明らかになる。

事例 1 :



事例 2 :



(ここで数字は年齢、—は姉妹関係、|は子関係を示す。なおここには牡は含まれていない)

このような母子系列についての記憶にかんしては、さきに言及したアフガニスタンのシェワ高原においてアラブ系の遊牧民にかんしても、搾乳時に一頭づつ捕まえては張り綱にそれを繋留する作業中に、五〇頭の羊の持ち主にたいして同様の質問を行った。その際も、かれは直ちにその個体の年齢とともに、それがどの母雌のなん番目の子であるかを即答した(一九七八年七月)。

なおトルコ系の遊牧民の、自己所有群の母子系列の記憶深度の深さについては、松原の報告がある(松原、一九八三、五一頁以下)

- 6) まずこのような介助行動について、筆者の観察事例として、インド・ラジャスタンの事例をあげておく。観察場所はジャイプールより東約四〇キロ、カロリにむかうアグラ・ロード上の地点であり、マルワリのラボーリに属する羊飼養の遊牧民について、かれらがキャンプしているところに、夕刻乳雌羊群が帰ってきたときの観察である。かれらは五〇〇〇頭の羊を、約四—五〇〇頭からなる一二の群に分けて管理している。テントはなく、露天で夜営する。すでに六時半、やや薄暗くなったところで、連れ帰った四—五〇〇頭の群を、なんら柵に入れることもなく、野営の焚火場から余り遠くないところに、しゃがみ込ませた。時期は二月中旬(一九九二年)、なお出産が続いている時期であったが、すでに二週間あまりの新生児が一〇数頭はいた。ちなみにかれらは羊からは搾乳しない。かれらはまず、昨日生まれた新生児を一頭小脇に抱え込んで、薄明のなかですでにしゃがみ込んだ群にわけ行て、実母を見つけて、その腹に新生児を押し込んだ。約五分あまり、母雌の首を抱えて固定したまま、哺乳させた。それがすむと、ついで二週間児を連れてきて、実母につける。また、母親を失った子に授乳させるために、実子とその孤児羊との二頭を一緒に連れてきて、一頭の母雌につけることも見られた。

他に、イランのフゼスタン、バクチアリの冬営地で観察した事例(一九九二年一月末)では、か

れらはテントの背後にある岩壁に開いた洞窟の中で羊を夜営させていた。夕刻一三〇頭の羊母群が帰ってくると、かれらはその中央洞窟の中に群を追い込んだ。中央洞窟の脇には、ちいさな別室があり、そこに新生児が囲われており、かれらはそこから新生児をつかみあげては、母群の中に入れる。母子が相互に相手を見つけ出して、授乳・哺乳関係をすぐに結ぶ場合は問題はないが、そうではないときには、子をつかみあげて、実母につける作業を行っていた。

- 7) イタリア中部、アブルッツォの山村、チェルクエト村上部で、移牧牧夫がおこなっている介助行動の観察（一九七三年）であり、時期は八月、すでに新生児は三ヶ月児になっており、すでに大きい。ただ、成長が悪いものに注目しており、乳雌の搾乳を済ませた後、残り乳を吸わせるために、そのような新生児をかかえて、実母を見つけ出す。そして実母の首をとらえて、子をそのわき腹に押し込む。このとき牧夫は、搾乳をするときに立てるとおなじ、「チュッチュッ」という唇音を立てる。筆者は、このお節介とも言える授乳・哺乳関係への介助、そしてそのときに立てる音と同じ音を搾乳時に立てるという事実のうちに、個体レベルでの接触を許容するような人一家畜関係の成立の契機を見るように思えて、かつてこのような出生間もない時期での母子関係への介入に、家畜化、そして後に始まる搾乳の開始へいたる道をみうるのではないかといったことを指摘したことがある（谷，一九七七，一六七頁）。いわば本論は、このような視点をもって以後提出された他の研究者の成果を参照しつつ、そのときの疑問に答えたものだということができる。

IV 家畜群と再野生化群との対比

まず、人の管理的介入を取り除いた結果としての再野生化群について、おもに小笠原の山羊の再野生化群の行動を観察した鹿野の報告を、ここでの論点にかかわるかぎり紹介したい（Shikano, K., 1984）。

まず彼が指摘していることは、

- 1) 草地で散開している群が、一見したところランダムなかたちで混じりあった均質群をつくっているかに見えるが、じつは成雌それぞれが、自己の遊動域とみなしているホーム・レンジをかまえ、相互に隣接するようなかたちで、分散しているということである。もちろんこう言ったからといって、それぞれのホーム・レンジで遊動する個体が、ホーム・レンジの境界を厳密にまもって、そのそとに移動することがないというわけではない。しばしば近隣の他の遊動域に移動し、しばらく他の個体とペアーを組むこともあって、ある種ルーズな離合集散性をもっていることも確かではある。ただ、ある程度のホーム・レンジへの固着性はみとめられ、すくなくとも生後6カ月までの子とその母とのあいだでは、授乳・哺乳にかかわって、しばしばその遊動域での相互的近接が認められるというわけである。他に、マウンテン・シープについて観察したガイストは、季節的移動ののちに、ふたたび戻ってきたときにも、雌は、一年前のホーム・レンジを記憶していて、そこに主たる遊動域を構えることを指摘している（Geist, 1971, Craig, 1981: 43-44）。つまり、相互に遊動域をこえて移動するというルーズさを示しながらも、雌のホーム・レンジへの固着性がみとめられ、かつ授乳・哺乳行動にかかわっ

た母子単位の凝集性が、一定期間、ホーム・レンジ内でみとめられる。そういう点で群は非均質な群としてある、ということになる。

そして、2) 牡について言えば、雌にみられるような、ホーム・レンジの形成は認められず、雌の遊動域を超えて放浪する。

ところでかつて、筆者は、家畜群でも、このような再野生化群に認められる母子間の特異的近接をはじめとした、社会的な特異行動が、放牧中に認められるかどうか確認しようとしたことがある。というのも、このような集団内での特異的行動があるのと、それらが一切なく、もっぱら均質なムレであるのとでは、等しく群居性と追従性とを利用した放牧時の牧夫の群誘導での効率にも差異が生ずる可能性があると考えたからである。

ルーマニアでこのような関心をもちながら、家畜群内の個体の行動を観察した結果としてまず知られたことは、管理された家畜群での、放牧中の個体の行動はきわめてランダムであるということであった。このことは、フルンターシャ¹⁾ という、特異的に牧夫の命令を理解し、群誘導に用いられる数頭の雌の行動を観察したさいに、あわせて知られた事実である。一見フルンターシャ、つまり「先頭をいくもの」と言った意味をもつ個体であるなら、かれらは、常に群の先頭をゆく傾向をもつのか。それとも牧夫が命令を与えたときだけ、それにしたがって行動するものか。観察の本来の目的は、このいずれかを確認するためのものであり、結局は後者でしかないことを知ったのだった。ただ、それとともに、普段は一般個体となんら変わらない行動をするこのフルンターシャの、放牧地での行動位置を観察することになった。結果として、彼らは、放牧地に向かう途上、隊列を組んで行進するときであれ、広い草地で散開し、行きつ戻りつ回遊して草を食うときであれ、つい先ほどまでは先頭に位置していたものが、一〇分後には末尾に位置する、また左方にいたものが右方にいると言った具合いで、短時間のあいだでさえ、それぞれがとる位置はまちまちで、まったくランダムなのである (Tani, Y., 1989: 194)。

また、再野生化群で認められた母子の特異的近接が、家畜群で果して認められるか否かにかかわる問題としては、管理上の差異によって、母子間の相互的記憶が持続されるケースと、そうでないケースとで、母子の放牧中の特異的近接の度合を比較することを試みた。それも当初は、離乳後、夏期放牧中でも、搾乳後に、母集団と当歳子集団とを接近させて、残り乳を吸わせるために、なお母子相互が実母・実子関係を記憶しているアフガニスタン・パシュトゥン遊牧民の管理群²⁾と、搾乳開始とともに母子を完全に分離して、いっさい残り乳を吸わさないために、相互的記憶が失われるルーマニア・カルパチア移牧民の管理群³⁾とで、観察を行い、その差異を確認しようと計画した。ただ、不運にもこの計画は、一九七九年のソ連のアフガニスタンへの進攻によって実現不可能になった。

そこで代わりに、筆者は、ルーマニアの当該家畜群で、予定どおり冬期に生まれたために、

すでに母子分離がおこなわれた6カ月子(A_2)と、5月にうまれたために夏期の放牧期間でもなお、母群に入れられたまま放牧され、授乳が続行していた3カ月子(B_2)に関して、それらが、放牧時に実母に特異的に接近する度を比較することで、両ケースでの行動上の差異を明らかにすることにした⁴⁾(Tani, Y., 1982:7-10)。その結果を簡単に述べるならば、 A_2 は、放牧時はもちろんのこと、キャンプ地に戻って、柵内で母子ともども混じりあう状況でも、実母に接近することはまったく見られなかった。それに対して、 B_2 は、放牧時に、ときに実母に特異的に接近することがあり、とりわけキャンプに戻って、実母に接近する度は高まり、柵内で座り込む際には、実母のもとにぴったりと近づいて、その脇に座り込むのである。いわば後者 B_2 は、再野生化群での母子関係をほうふつとさせる行動をしたのに対して、前者 A_2 は、母子分離を受け、母子相互認知のための記憶を失い、特異的接近行動をもうやしない個体となっているということになる。つまり、母子の相互記憶を維持しえているものと、それが断ち切られたものとのあいだで、あきらかに実母・実子関係での近接に明白な差異が生じるということである⁵⁾(具体的な接近距離については注5での表3参照)。

ところで、管理された放牧群では、普通離乳を済ませたあと、搾乳がなされる夏期放牧地では、母群と当歳児群とは二群に分離されて放牧されるのが一般である。もちろん、この夏の搾乳期も過ぎ、交尾期にはいる秋の到来とともに、両群はひとつにまとめられる。しかし、ルーマニアの事例でのように、早く離乳して、夏期にいったい母子の出会いの機会を与えない場合でも、アフガニスタンでのように、夏のあいだも残り乳を飲ます群でも、母子はそれまでは二分されて放牧されているために、夏の放牧地では、放牧中に子が実母に近接する機会は(B_2 のように遅れて出産するようなケースを除けば)与えられていない。こうして、家畜群では、野生群ならばもっとも母子近接が起こりやすい期間中、放牧中の母子分離がなされるために、再野生化群でみられたような母子の特異的近接が野で起こる可能性が回避されるわけだ(ちなみに母子分離の同様の効果を太田も同時期明らかにしている。太田, 1982)。

おまけに、これらの群は、キャンプ地から毎日異なったルートをとって、異なった放牧地に連行されるために、再野生化群にみられたような、雌のホーム・レンジさえ、その形成が阻止されている(Shikano, K., 1984)⁶⁾。こうして、母子分離によって、内部で特異的近接が起こる契機をもたない母群と子群とが、鹿野の言葉を借りるなら、人のキャンプ地をいまやホーム・レンジとするものとなって、そこから毎日放牧地に連行されている。

家畜群が、きわめてランダムに位置を変えながら移動する、アモルフな個体の集まりとしてあり、再野生群に認められるような母子の特異的凝集性をもはやもたない群となっているのは、こうして群のキャンプ地への繋留、そして母子分離という、日々繰り返される人の介入の結果だと見なすことができる。こうして牧夫は、もはや特定のホーム・レンジへの固着、そして母子の特異的凝集傾向をもたない、いわば均質な群を前にして、たかだか二人で、群居性と追随

性を利用しつつ、数百頭の群を、楽にコントロールし、誘導できることになっているというわけである。

以上、再野生化群と管理された家畜群との行動習性上の差異に注目して、その差異をもたらしているものがいかなる人の介入によって生じているのかを指摘した。要は、そのひとつは、家畜群でなされる母子分離であり、それによって野生群で認められる母子の特異的接近の契機が失われている。そしてもうひとつは、日々キャンプ地から出発する移動放牧であり、それによって放牧地でのホーム・レンジ形成が阻止され、その代わりに人の居留地をホーム・レンジとした群が形成されているということであった。こうして、日帰り放牧や母子分離といった介入が、再野生化群と家畜群との行動習性上の差異をもたらしていることが明らかになった。

では、家畜群でこのような介入がどうして可能となっているのか。いうまでもなく、再野生化群や、本来の野生群のように、出産期をも含めて群を野に放置していたのでは、ナチュラルなホーム・レンジ形成を阻止するような母子介入は不可能である。少なくとも群は、人の手元で分離されなければならない。また人の居留地をホーム・レンジとさせる、人の居留地からの日帰り放牧も、人の居留地への群の繫留のもとではじめて可能、いや必要になったことだと言わねばならない。再野生化群との比較を通じて明らかになった家畜群の特性が生まれるためには、このようにみえてくると、すくなくとも＜人の居留地への群の繫留＞ということがなんらかのかたちで実現されていなくてはならない、ということになる。ではそれはどのようにして可能になったか。ただこの問題にうつるまえに、ただ、もうひとつの比較の材料、いわゆる半家畜化されているといわれるトナカイ群と一般の家畜群との行動上の差異と、両者での人の介入の差異との相関についての検討を行っておきたい。

- 1) フルンターシャ (frunțașă) については、別稿「家畜と家僕—去勢牡誘導羊の地理的分布とその意味」(谷、一九九二年、七〇頁以下) 参照。要は、特異的に牧夫に人づけされ、呼び名と命令サインを与えられると、それにしたがって行動し、結果として群全体を誘導するのに役立てられる雌のことを言う。この技法は、おもにルーマニアにおいて広く採用されており、一群中に、複数頭いる。牧夫に、このフルンターシャを指摘してもらい、それに番号をつけた色付きのリボンをつけて、放牧中にどのような位置どりをするかを観察したものである。観察は、ルーマニア・ビストリツァ県シェビス (Șebis) 村の一牧夫の群に関してなされた (一九八〇年九月)。
- 2) アフガニスタンのパシュトゥン (カンダハリ系) 遊牧民は、すでに当歳児が、4・五か月児となり、すでに当歳児群としてまとめられて放牧にだされる段階に達している六・七月の夏期放牧地でさえ、午後母群の搾乳を済ませたのちに、キャンプ地の近くにたむろしている母群に、この当歳児群を近づける。すると、子群から鳴き声があがり、母雌群めがけて走り出す。母雌は、この子の鳴き声に呼応して声をあげる。こうして実母と実子との呼び交わしによって、子は実母を見いだして、母雌の乳房にくらい付く。
- 3) 牧夫は、搾乳開始とともに母子分離すると、一〇日あまりで、母子は相互的記憶をうしなうと考えている。

- 4) この観察は、ルーマニア・ビストリッツァ県シェビス (Şebis) 村の一枚夫の群に関してなされた (一九八〇年九月)。
- 5) 観察対象として、＜母雌A0とその子A1 (1.5才), A2 (0.5才)＞, ＜母雌B0とその子B1 (1.5才), B2 (0.3才)＞という、二つの母子集団を選んだ。A1, B1はすでに二年子である。差異はA2とB2間にあり、前者は普通の出産期にうまれて、夏期すでに母子分離のもとで別群で放牧されている。それにたいして後者は遅れて生まれたために、夏期母雌群のなかで放牧されて離乳されていない。下の表は、それぞれの子が、母親と保つ距離の平均を、放牧地でと、夕方帰ってきて広いフェンスの中で回遊しているときとの二つのシチュエーションにわけて示したものである。ちなみにB2を除く、他の子が、母親ととる距離が、フェンス内でよりも、放牧地で短いのは、放牧地では、群全体がかたまりあっているのに対して、フェンスに入ると散開するためである。それにもかかわらず、B2に関しては、フェンス内で、かえって極端に母に接近している点が注目されるわけである。

表 3 母子間平均距離(m)

	フェンス内	放牧地
A0-A1	40	14
A0-A2	17	19
B0-B1	43	22
B0-B2	2.5	14

- 6) 家畜群の成立に関して、このような人の居留地からの放牧によって、居留地をホーム・レンジとした群が形成されたという点の指摘は、鹿野によってすでになされていた (Shikano, K., 19)。筆者の考察の固有性は、むしろこれ以後の、トナカイ群との比較にあり、以後論ずるように、出産期の母子介入の発生を、人の居留地への繋留とそれによって必然化した放牧という事態のなかで論じた点にある。

V 家畜群と半家畜化トナカイ群との対比

われわれはすでに、家畜群が、外に対して閉じた、ある一定の群としての輪郭をもった群となっていて、異なる群同士が出会っても、簡単には混じり合わない群になっているのに対して、トナカイの群では容易に混じりあうことを知らされている。問題は、いったいこのような、個体の群への帰属性の強弱が、どのような介入上の差異によって起こっているのかである。

もちろんそこには、羊・山羊とは異なった、トナカイ固有の習性というものも考えられなければならないだろう。しかし、いまその点をさておくとして、家畜としての羊・山羊の管理をする牧夫の群管理技法のレパートリーと、トナカイ群を管理する牧夫の群管理技法のそれとのあいだに決定的な差異があり、前者においては出産時の母子関係への介入があるのに、後者のトナカイ管理においては、まったくそれが認められないということに注目したい。

もちろんトナカイ群の管理者でも、自己の所有する群が、他の群と混じり合わないように、

その危険があるときには、外的刺激に対する反応の仕方など、群の行動習性についての知識にもとづいて、群誘導を行ないはする(葛野、一九九〇、一八頁以下。鄭、一九九二、七〇頁以下、一四八頁以下)。また、出産以後、自分の所有する母雌から生まれた子どもの耳に、自己の所有マークを刻みつけるために、群を、あらかじめ設置してある追込み囲いへと誘導し、そこで投げ輪をもって個体を捕らえては、耳に刻みをいれる(葛野、一九九〇、一五八頁以下)。それは、混入や移出によって起こる、所有権の潜称や争いを回避するための、あらかじめの予防策である。ただこのような、毎年行われる所有権のマーキングのさい、かれらが、その年に生まれた当歳子が、自分の所有する母雌の子であることを確認する手がかりは、その新生児が、自分の所有マークをつけた雌の近傍にいるという、いわば母子同伴の事実なのである(葛野、一九九〇、一九頁以下)。

ここで、彼らがもし、出産時に、なんらかのかたちで出産の現場に居合わせうるのなら、なにも群を囲いに誘導して、母子同伴の事実などみとどけなくともよいはずだ。出産の時点で、自己の所有する母雌がこの子を産んだという事実にもとづいて、その場でただちに、当の子に所有のマークを刻みつければよいからだ。ところが出産は、彼らの居留地から遠くはなれた、草をはむにまかせている原野において、所有者によって見とどけられることなくなされている。いったいどの子が、どの母雌の子どもであるのか。出産場面に居合わせないかれらが、それを知る方途は、母子同伴の事実でしかなく、だからこそかれらは、群を柵に追い込んで、母子同伴の事実をもとに、投げ縄で捕らえては、刻みを入れるのである。もちろんこのように、出産と、それから始まる授乳の場面に居あわせない管理状況下では、さきに言及した授乳・哺乳関係への介助といった、家畜群での慣習化された介入技法自身も行使されえない。いや、そのようなことさえする必要がないと言うべきだろう。さきに筆者は、出産後の授乳・哺乳関係への介助は、もし彼らを野生のままに放置していたならば必要のないものであり、ナチュラルな母子の愛情の発露として、授乳・哺乳関係は、彼ら自体のもとで達成されていたはずのものだとも言っておいた。半家畜化されているに過ぎないトナカイ群でも、ことは同じで、人の介助なしにも、自然な授乳・哺乳関係がスムーズに成立しているのである。こうしてトナカイの管理者は、群を人の居留地に繋留しないために、授乳・哺乳関係への介助などする必要がないと同時に、まさに出産の現場を見とどけえないために、群を柵に追い込んで、母子同伴の事実から、実母・実子関係を確認する必要が生じているのである。

このようにみてくると、群管理上の負担に関して、半家畜化されたトナカイ群の管理者と家畜の管理者とのあいだで、群の人の居留地への繋留の有無という差異を介して、たがいに相反する作業を背負い込むことになっていることが明らかになる。つまり群を人の居留地に繋留していないトナカイ群の所有者は、居住地への繋留という人為的な介入をしていないために、出産後の母子の授乳・哺乳関係については自然にまかしょうのだが、出産の現場を見とどけない

ために、群を柵に追い込んで、母子同伴の事実を確認するという作業をしなければならない。それにたいして、群を人の居留地に繋留している家畜の管理者は、出産の現場を見とどけるために、柵に追い込んで母子同伴の事実確認するという骨折りはしなくてもよいのだが、まさに居住地への繋留という人為的な介入をしているために、出産後の母子の授乳・哺乳関係に介助をすることになっている。

ところで、出産の現場をみとどけないために、どの子がどの母雌の子であるのかを知ろうとすれば、同伴の事実を見とどけなければならないというのは当然である。それにたいして、居住地への繋留という人為的な介入をしたために、出産後の母子の授乳・哺乳関係に介助をしなければならないというのはどういうことか。単純に考えるなら、繋留しようが、しまいが、母子間には親子の愛情があるのだから、なにも実母実子の授乳・哺乳関係にわざわざ介入して、介助などする必要はないと言えそうである。にもかかわらず、もしそれが必要になったというのであれば、それまでスムーズに成立していた実母・実子の自然な授乳・哺乳関係が、まさに人の居留地への繋留とともに、なんらかの経緯で損なわれることとなり、一見過剰な授乳・哺乳関係への介助が必要になったと言うことなのだろうか。このあたりは検討を要する。

ともあれ、半家畜化されたトナカイ群と家畜群とを比較することにしたのは、両者のあいだに行動上の差異がみとめられ、前者にあっては、外に対して閉じた群の輪郭が欠如して、群間での移動がおこるのに、後者では、外に対して閉じた管理群としての輪郭が形成されている。いったいこのような差異は、どのような人の介入によって発生しているのか。また管理群としての群の輪郭形成は、いかなる介入によって成立したのか。こういう疑問がさきにあったからだった。そして、このような差異をもたらすことになったかもしれない要因として、両者の群管理技法上の差異、つまり出産時の母子間への人為的な介入が、前者では欠如しており、後者ではそれが認められるという事実を目を向けたのであった。ただ、このような管理上の差異を指摘しただけでは、なぜそのような介助行為の付加が、群の輪郭形成をもたらしたのかを説明することにはならない。いったい授乳・哺乳関係に人が介入したからと言って、それがどうして個体の群帰属性を高めることになるのか。むしろ、二つはおおよそ因果関係のない、相互に独立した二つの事象であるかにさえ見える。すくなくとも、半家畜化されたトナカイ群に関しては認められず、管理された家畜群において認められる二つの事象、〈母子関係介入〉と〈群の輪郭形成〉とのあいだに、納得できるような因果関係が架橋されないかぎり、それらはたまたまの共起的事実として指摘されるにとどまることになる。

ただ、うえにみた具体的な管理上の差異の比較から、ひとまずは次のようなことだけは言いうる。つまり出産後の授乳・哺乳関係への一見過剰な介入といった、出産時の母子介入が可能になるためには、群が、人の手元に繋留されていなくてはならないということである。トナカイの管理者は、人の居留地に群を繋留することはしない。そして授乳・哺乳関係への介助を行

わない。それにたいして、家畜管理者は、群を人の居留地に係留するとともに、それまでは必要ではなかった介助をあたかも必要なことのように開始する。つまり両者間の基本的な差異は、群の人の居留地への繫留の有無とも言うるのである。もしここで、群を人の居留地に繫留するとともに、授乳・哺乳関係への介助的介入というものが必要になり、同時にその繫留が群の輪郭形成を促す場を提供するという説明が可能になるのであれば、一見無関係であるかに見える二つの並行事象は、たまたまの共起現象ではなく、人の居留地への繫留という新たに招来された事態から生じた二つの結果として位置づけることができることになる。では、そのようなことがはたして言えるのかどうか。この点もさらに検討されなければならない。

ただし、これらさらなる検討を必要とする問いはさておくとして、以上、前章の再野生化群との比較からも、この章の半家畜化したトナカイ群との比較からも、家畜群を特異なものとしている基礎に、群の人の居住地への繫留という事実があるということだけは確かなこととなった。そこでまず、群の人の居留地への繫留はいかにしてなされたか、またこのような人の居住地への繫留という事態がもたらした意味とはいかなるものであったか、という問題をさきに取り上げることにする。

VI 人の居留地への繫留はいかにしてなされたか

さて、人の居留地への群の繫留は、いかにして開始されたのか。この問いは、まさに家畜化の始源をなす人の初期介入を問うものであり、これまでも仮説的な見解がすでにいくつか提出されている。

それら先行の仮説として、まず想起されるのは、いわゆる今西の「群への人づけ」と言われる仮説である(今西、一九四八)。つまり、移動する野生群を人の手元につなぎ留める以前に、人が、移動する群に繰り返し接近することで、親和性を醸成し、人が群に接近してもそれを避けることのない状況をつくりあげる。こうして群の行動に人が随伴することを許容するような関係を醸成することが、最初に起こったというものである。この今西の見解は、たんなる思い付き的な仮説提示にとどまらず、群生活者としての動物についての理解に根ざしている。ところで松井は最近、この今西の指し示したところに沿いつつ、群を直接的な管理下におく以前、ブレドメスティケーションの段階において開発されたであろう、羊・山羊などの視覚特性にかかわった人の近接と誘導の技法について論じている(松井、一九八九)。筆者も、いわゆる考古学的な意味での家畜化の段階以前に、この種の「群への人づけ」段階があったに違いないと思っている。半家畜化されたトナカイの群と人の関係はまさにそのような段階が存在することを示しており、おそらく群を柵に追い込んで捕らえるだけでなく、所有の印をつけるということも行われていた可能性はある。しかし、自己の所有印を刻印しようとも、トナカイの管理者

は、群の個体を識別しているわけではない。ところが考古学的な意味での家畜化の段階にはいるとともに、群管理者は、個体識別のもとに年齢に応じて間引きを行うものとなっている。そしてここで問題にしているのは、まさに、移動する自然群に人が随伴するといった段階から、いかにして人は、これらの野にある群を、みずからの居留地につなぎ止めることに成功したのかという点である。とするなら、この仮説は、当座問題にしている出来事以前の人-動物関係の成立に関するものである。というわけで、ここでは、群への人づけではなく、人の居住地への群づけとでもいえる他の仮説に論点を移し、それについて検討することにする。

まずその種の仮説として、1) 捕獲説とでも言えるものがある。それは、捕獲されたものが、捕獲の容易な若い個体であるか、アダルトであるかはさておくとして、人はいく頭かの牡雌の個体をまず捕獲した。そしてそれらを飼養し、数を増やすことで、やがて大きな管理された家畜群が創り出されたと考える。ところで、このような想定のもとでも、まず捕らえられたのが、生後まもない新生児なのか、それともアダルトであったのか。そのいずれであるかによって差異が生ずる。たしかに生後間もない新生児を捕らえる方が容易である。出産間もない状況にある母子に目をつけて、追いたてを行ない、逃亡する母雌のあとに残された新生児を生け捕りにすればよい。しかし、その場合、いったいこれらの新生児の授乳をいかにして実現したのかという疑問が生ずる。こうして、少なくとも母子ともども捕獲されるという状況が想定される。それは、群への人づけが達成されている段階ではさほど難しいことではない。トナカイ遊牧民が、新生児に所有印をつけるために、季節的に柵に追い込むときとおなじ方法で、追込みをおこない、母子ペアを、母子ともども捕獲すればよい。そのうえで出産中の母雌を追い立てて子をつらえ、母子ともどもペアで捕獲されている母雌をして、この孤児となった子に授乳させるようにすればよい。もちろん強制しなければ、子には、実母しか授乳しようとはしない。ただ、現在でも広く行われている、実母でない乳雌をしてその孤児に授乳許可を強制する方法、つまりその母雌の尿をその孤児に塗ったり、狭い柵にその母雌と孤児の二頭を閉じ込めることで¹⁾、授乳を許可する関係は成立し、この問題は解決するのである。

ところで、他に、捕獲しやすい新生児とともに、母雌を捕獲するもうひとつの可能性を示唆した仮説として、いわゆる2) おとり説と言うものがある。このおとり説としては、生け捕りにした牝をもって、野生雌を引き付けるという、古典的なハットの見解がある (Hatt, G. 1918 :101以下)。ただここでは、もうひとつの梅棹のおとり説を紹介しておこう。かれは、モンゴルの牛の観察で、放牧に出た母雌牛が、牧夫によって呼び戻されなくとも、夕刻になるとともに、キャンプ地に繋留されている子牛の泣き声にうながされつつ、授乳本能にもとづいて、キャンプ地に戻ってくる事実に着目した。そして新生児を捕獲することによって、それをおとりとして用い、野生の母雌を呼び寄せることに成功したという仮説を提出した (梅棹, 一九五〇, 一九五一, 一九六五)。もちろんこの見解に関しては、子を捕獲することで、はたして実母が

自ずから人の居留地によってくるかどうか、ということがチェックされていないだけに、ひとつの仮説に留まる。ただ母子関係の紐帯への介入に目を向けた点では意味がある。そして、この母子関係紐帯への介入に対する梅棹の注目の延長線上とはいえ、とりわけ出産時の母子関係への介入状況を、モンゴルの牧民のもとで詳細に観察した小長谷は、次のような観察事実を最近報告した(小長谷 一九九一:五六~六五)。

いまその観察事実を紹介すると、次のようなものである。出産はもちろん冬期に集中して生ずる。ところで分娩が、夜間の群の繋留地で生ずるときはもちろん問題はない。しかし分娩が、昼間の、群が移動している放牧中に起こることも稀ではない。牧夫は、どの個体が近く分娩するというのをまえもって予知しており、放牧中もこの個体に特異的な注目を向けている。ところで、やがて陣痛を感じ始めた母雌は、移動する群からはなれて、野にしゃがみこみ、やがて出産となる。新生児は生まれてすぐは力ない状態で横たわっているが、母雌はそれをなめる。また相互に鳴き交わす。こうして、相互認知に必要な匂いや泣き声を介した相互的記憶が両者に成立する。ちなみに、この母子の相互認知記憶の確立は、のちの母雌の授乳・哺乳関係の確立にとってきわめて重要であり、出産後のこの短い時間内(出産後約一五分内とされているが)に確立される(Craig, J.V. 1981:118)。もしその期間中に子が引き離されたり、母雌がなにかの理由でその場から追いやられたり、立ち去るようなことがおこると、その後のスムーズな授乳・哺乳関係が成り立たないと言われる。ともあれ、このようにして相互的記憶に必要なインターアクションがなされてから、新生児はやがて立ち上がろうと試みる。そして2-30分もすると、ゆらゆらと歩き始めて、母雌の移動に追従することができるようになる。普通母雌は、子がこのようなよちよち歩きができるようになるまで、近傍で周囲を見回しつつ、待機するのが普通ではある。ただ、人によって引導されている群は、この分娩している母雌とはおかまいなしに移動する。取り残された母雌にとって、この本来の群に戻ることもまた、気にかけるべきことである。こうして、時に、母親の歩調と同じ歩調で、母雌についてゆけるようになっていない子を残して、母雌が群に合流しようと、その場を立ち去るということも起こる。このようとき牧夫は、取り残された子を拾って、キャンプに持ち帰る。

ただ小長谷が注目したのは、このような出産時にとる牧夫の次のような行動であった。つまり、出産するだろうと注目していた雌の分娩が終わるころ、牧夫は、この出産直後の母子のペアに近づく。そして、やおら新生児を取り上げ、その新生児を、母雌に向けて示しつつ、あとすざりをするように後退しては、呼び声を立て、母雌を手元におびきよせる。そしてこの母雌のおびきよせを繰り返しながら、結局、実母・実子の相互認知関係を維持したまま、新生児ともども母雌をキャンプ地にまで連れもどすのである。小長谷はこのような、新生児の捕獲と、それをおとりにした母雌のキャンプ地への誘導連行という介入のうちに、野にある羊・山羊の人の居留地への繋留への鍵を見るのである。

それまで、たんに母親が子のもとから立ち去った後に取り残された新生児を拾い上げ、キャンプ地に持ち帰る情景しか観察したことなかった筆者にとっては、この小長谷の事実報告と家畜化の起源論への視点は、きわめて刺激的なものであった。筆者はその後、このような技法が、中近東でもみとめられるものであるかどうかを確かめたく、イランのバクチアリの牧民や、ギリシャのサラカッチャニの牧民のもとで、その技法の有無を確かめた（一九九二年）。解答は肯定的で、出産時の介入としていかにも周知の技法であるという口ぶりの解答をえた。いわば、意外に広く分布する、放牧地での出産時の母子介入の技法であるということになる。

ただ小長谷の、出産時の母子関係への介入が、家畜化の起源にとって重要だとみなして行った詳細な観察の意味は大きい、はたしてこの子を母雌に見せつつ連行する介入が、家畜化の最初の時点で、群を居留地に繋留する決定的な介入であったかどうか、なお検討を要する。というのも、この子を母雌にみせながら、母雌を誘導連行する技法は、のちにも検討するように、群を人の居留地に繋留することで開始された日毎の移動放牧という状況がもたらした、それ以前ではスムーズに成立していた実母・実子間の授乳・哺乳関係の不安定化に対処するため、事後的に発生した技法である可能性も、十分に考えられるからである。小長谷が問題にしている、新生児の捕獲と、それをおとりにした母雌のキャンプ地への誘導連行という介入は、まさに放牧中に出産が行われるからこそなされている介入である。放牧を行っているからこそ、新生児が取り残されて、牧夫によって拾われて、キャンプ地に運び込まれることもある。そのように取り残されることで、母子相互間の認知が確立しないのでは、のちに授乳を拒否する母雌と実子の関係が生まれてしまう。このようなケースが起こるのをできるだけ少なくするために、子を拾い上げて、母雌を誘導しつつ、母子の相互認知が断たれないようにする。じつは、子拾いと母雌誘導の技法は、このようなことを目的とした介入技法なのである。もしそうであるなら、このような介入は、群を人の居留地に繋留する技法と言うよりも、居留地への繋留以後になって発生した、放牧という事態のもとで必要になった、事後的な技法だということになる。

いったい人の居留地への群の繋留に、いかなる介入が最初におこなわれたのかという問いは、証拠が残されていない過去の出来事であるだけに、いくつかの可能性にまで狭めることはできても、それをひとつに特定することは難しい。むしろひとつの方法に限定するよりも、すでに群ごとの人づけをして、親和性を維持している群から、上述のような可能な方法をそれぞれに適用することで、ときには母子ペアー、ときには孤児となった新生児を、人の居留地にもたらすことになったと見る方が、むしろ自然なのかもしれない。

もちろんここで、柵に追い込んで捕らえた母子のペアーであれ、子をおとりにして連行誘導された母子ペアーであれ、あるいは追い立てをおこなって捕獲した新生児であれ、こうしてえられた集団が、たんに人の居留地に係留されることで、ただちに家畜群としての特徴を帯びるわけではないことは注意しておくべきことだろう。とりわけ捕獲されたアダルト群が、この捕

獲によって、ただちに、人の居留地をホーム・レンジと見なすものへと変化し、放牧にだしても、人の引導に応じて従順に誘導され、自らこのキャンプ地に戻ってくるような群となったとは、まず考えられない。最初に捕獲されたアダルトたちは、非放牧のまま、草を供給される対象であったとみなすのが、自然だろう。その後、人の居留地を自己のホーム・レンジとみなし、人の引導に従順に従う放牧可能な個体群が形成されるのには、すくなくとも次世代の子群が居留地で出生し、そこで成育するのをまたなければならない。しかも、群全体が、このような個体からなる集団にとって替わり、真の意味での家畜群が成立するのには、繫留の開始以後数世代を待たねばならないことになる。最初に羊・山羊群を自己の居留地に繫留した群管理者は、この時点で、真の意味で人の居留地を自己のホーム・レンジとみなした群、言い換えれば、放牧にだしても、人の引導に応じて従順に誘導され、自らこのキャンプ地に戻ってくるような群を手元に見いだすことになったといえるだろう。

VII 居留地への繫留がもたらした〈新たな事態〉

さて、考古学的な意味での家畜化が、羊・山羊においてまず開始された時点で、いわゆる動物考古学者たちが、起こったと確認している新たな出来事が招来されるためには、すくなくともどのようなことが起こっていなければならないか。IV、V章でおこなったことは、再野生化群や半家畜化されるに留まっているトナカイ群の行動特徴と、家畜群の行動特徴との差異を、人為的介入上の差異を変数としたときの結果での差異と見なすことで、家畜群に見られる行動特徴が、基本的にどのような人為的介入を前提として形成・維持されているかを、明らかにすることであった。そして、再野生化群との比較からも、半家畜化されたトナカイ群との比較からも、ともに示唆されたことは、家畜群の特徴の形成にとって、群の〈人の居留地への繫留〉が基本前提であるということになった。そこで前章で、このような群の〈人の居留地への繫留〉をもたらし人の初期的な介入として、どのようなものが考えられるかを、従来の仮説を検討するかたちで論じた。そして少なくともその介入の幅を、ある可能性の範囲に狭めたのだったが、ひとつの介入経路に限定することは控えた。というのも本論の本来の目的が、考古学的な意味で示されている家畜化の時点で、なにが家畜化への初期条件として働き、いかにして考古学者が指摘しているような〈新しい出来事〉がもたらされたのか。つまり考古学的意味での〈新たな出来事〉を適切に位置づける一連の出来事連鎖を、人一家畜間の新たなすり合わせの過程として再構成することにあっただからである。

では、〈群の人の居留地への繫留〉という初期条件は、結果としていかなる新たな出来事を、一連の出来事連鎖としてもたらしことになったのだろうか。考古学者によって指摘されたものはひとまずさておくとして、管理上必然的に想定されうる事態を描き出すということで、さら

に考察を進めることにする。

まず、動物考古学者は、これまでの消費された残存動物遺骨の存在様態の比較検討から、羊・山羊の家畜化が最も早く進行した地域として、アナトリア東部からイラン西部にいたるザグロスの丘陵地をあげている。しかもこれらの証拠が見いだせる住居跡の住人は、半定住のテント居住者で、しかも穀類を製粉するための石道具をもっている。おそらくはこの住人達は、すでに農耕を平地では行っており、しかも季節的にこの土地を訪れることで、半栽培化した麦草原で穀物が実るのを採集にやっていた人々ではないかと見られている (Hole, 1989)。もちろんこれらの地域は、禾本科草原が広く分布している地域であり、麦科の穀物がみのる頃には、多く狩られていた羊・山羊をもふくめた偶蹄類もまた群をなして、この禾本科草原にやっていたに違いない。羊と山羊とではもちろんその生息地において差異があり、羊はより低地、そして山羊はより高地をその生息地としている。ただいずれの生息地であれ、麦科の草原、そして農耕適地はその近傍にみいだせる。家畜化は、まさにこのような麦科の草原で季節的にそれを収穫にくる場所、ないし初期的な麦農耕が営まれているところで起こっていることになる。家畜化を開始した人々が、家畜化の対象とした群は、まさに収穫期にそこに季節的にやってくる羊・山羊群であり、家畜化を実現した場合は、実った麦を求めて人と群とが会う場であった可能性は高い¹⁾。

いまここで、初期の麦農耕なり、季節的な麦の採集を行っている人々が、このような場で、さきに想定したような人の居留地への繫留を開始したとしよう。もちろん、その当初、いまだ人の居留地をホーム・レンジとするに到っていない第一世代だけからなる群にかんするかぎり、群のサイズも小さく、それに草を補給することはさして負担ではなかったにちがいない。しかし数世代をへて、群がすべて、人の居留地で生まれ、そこをホーム・レンジとする個体からなる、完全な意味での家畜群となる時点では、群のサイズも大きくなり、草補給の負担はけっして楽なものではなくなる。しかも群は人の居留地をホーム・レンジとした群となっている。こうして、居住地から離れた禾本科草原への放牧という管理技法が生ずるのは必然である。人の居留地に繫留された群の日帰り放牧は、こうしてさして時をおかずに開始されたと考えられる。そして、それは、人にとって、およそこれまでには会うことのなかった＜新たな事態＞であっただけでなく、羊・山羊群にとってもまったく＜新たな事態＞への遭遇であったと見なすことができる。では、このような人の居留地への繫留と、それによって必然的にもたらされた日帰り放牧という＜新たな事態＞は、どのような出来事を、人と羊・山羊とのあいだにもたらしただろうか。

ここで、まず放牧可能な群の成立によって生じた新たな事態というものを、出産の場面で想定し、それを、家畜化以前の出産場面と対比してみたい。

野生状態では、群は、毎日野で草をはむが、放牧群のように常に移動を繰り返しているわけ

ではない。みずからのホーム・レンジで子を産む母雌は、等しく自らのホーム・レンジで回遊している他の個体からなる群の中で出産する。このような母雌は、放牧群でのように、移動する群から取り残されるようなことにはならない。したがって、遠去かろうとする群に再合流しようとして心がける必要もない。周辺で草をはむ仲間を横にみながら、新生児の近傍に居留まって、安心して授乳・哺乳関係の確立に必要な時を費やすことができる。

ところが、人の居留地に繋留され、毎日移動放牧をうける群になるとともに、雌は、移動する群から離れて分娩するという事態に見舞われることになる。言い換えれば、それまで安定的であった母子の相互認知、ひいては授乳・哺乳関係の確立に重要なインターアクションが、きわめて不安定な状況に曝されることになる。こうして、群に合流しようとした母親の後に取り残された新生児を拾って、キャンプ地に持ち帰るという事態も発生する。このようなケースでは、しばしば母子認知が確立していないために、後に母雌がキャンプ地に帰ってあと、この実子に授乳することを拒否する母親が発生する。まさにそういうことが起こるからこそ、小長谷が観察した、子をおとりにした母雌のキャンプ地への誘導という介入が、授乳・哺乳関係の確立のために重要なこととして、母子紐帯記憶維持のために考え出されたと見なしたい。

ところでさきに筆者は、現在の放牧群管理で一般的な介入技法のひとつとして認められる、授乳期の授乳・哺乳関係への介助について言及しておいた。牧夫は、母雌群を放牧地からキャンプに連れ帰ると、子群に出会わせ、授乳させる。そのとき牧夫は、群全体を見渡しながらか、実母を見だしえないものや、授乳を拒否された新生児をかかえて、実母をとらえては、その腹の下に押し込む。また母親が出産時に死ぬことで孤児となった新生児が、他の乳雌から哺乳できるように、さまざまな技法に訴えていた。このような授乳期でのやっかいな母子への人為的な介助が必要になったのも、じつはもとを質せば、移動放牧の開始によって発生した出産状況の変化にあると言いうる。言い換えるなら、群を人の居留地に繋留することで、人は、望むときに肉資源を入手できることになった代価として、放牧という新たな負荷を背負っただけでなく、放牧による出産状況の不安定化によってもたらされることになった、スムーズに哺乳できない子のために、実母・実子の授乳・哺乳関係の成否への注目と、それが成り立たないものへの介助という、新たな負荷を背負い込むことになったのである。

ただここで、実母・実子の授乳・哺乳関係への介助という介入が、たんにマイナスの負担のみをもたらしたわけでないということも、あわせて指摘しておかなくてはならない。すでに指摘したように、半家畜化されるに留まっているトナカイ群管理においては、出生時での母子関係への介入はなかった。そしてこのようなトナカイ群では、たとえその群を柵に追い込んだあとでさえ、人は、投げ縄で個体を捕らえはかばなかった²⁾。ところが、出生時の母子関係へ人為的な介入がなされる家畜は、もちろん個体差はあるものの、容易に捕らえうる、親和性をもったものとなっている。問題は、このような差異がどうして生じたかということにも関係するが、

家畜群の管理者は、いまや放牧によって日々実母から引き離される新生児に、夕刻時の授乳介助をおこなうことで、まさに出生直後から、その新生児に接触することを許容させている。新生児の管理者へのインプリンティングがそこで生ずることになり、その後も身体接触を意に介さない、管理者に親和性をもった個体が、この介助をつうじて誕生していることになる。いかなれば、それまでの半野生段階では、なにも授乳補助などしなくともスムーズに成立していた母子間の授乳・哺乳関係を、人為的な介入で不安定におとしめ、それによって授乳補助というお節介な好意の押し売りをすることで、人は、個体との親和性を、それが幼児である段階からとり結ぶことになった、と言えるだろう。

ちなみにこの点に関連して、中近東よりはやや遅れるが、紀元前6000年紀、家畜化の技法が伝播することで、明らかに羊・山羊の家畜化が開始されたと考えられるベヘルガルの遺跡（現在はパキスタンのバルーチスタン州に属する）の埋葬遺跡で、牧人とみなされる遺骨とともに若い山羊の遺骨が併葬されている事例が見いだされている。家畜化の開始時点での管理者と幼児固体との親和性を示唆するものとして興味深い（Lechevallier, R.H., Meadow, R. et Quivron, G. 1982:99-106）³⁾。このような幼児段階からの人との親和性の確立が、のちに開始されることになる搾乳可能性の条件を、意図せざる結果として、整えることになるということもついでに指摘しておきたい⁴⁾。

ただここでは、この親和性の成立とは別に、さいわいな実母・実子の授乳・哺乳関係の成立を期待した、実母・実子のペアへの注目、そして必要に応じて行われる授乳補助と言う、新たに抱え込むことになった作業を通じてもたらされた、もうひとつの効果に注目しておきたい。群管理者は、この作業を実行するにあたって、個体識別に必要な個体特徴、そしてどの母雌とどの新生児とが母子ペアをなすかを正確に記憶しなければならない。すくなくとも、現在の家畜管理者に関して言えば、すでに指摘したように、彼らはまさにこの出生時の時点、授乳補助作業を通じて、このような記憶を脳に刻印している。そしてそれを日々行うことで、長期記憶として固定して、のちに個体の年齢に応じた計画的な間引きをおこなっているのである。しかも、さきにのべたように、考古学者は、考古学的意味での家畜化の時点で、＜新たな出来事＞のひとつとして、年齢に応じた間引き戦略をもった群管理者の出現を指摘していた。いうまでもなく、このような群経営が可能になるために、群管理者は年齢を割り出すことができる個体ごとの知識をもっていなくてはならない。いったいこのような知識が、いかにして記憶として刻印されることになったか。もはやここで改めて説明する必要もないだろう。

家畜化への過程として、群の人の居留地への繫留と、それによって必然的に招来されることになった移動放牧という状況がもたらした、新生児をめぐる＜新たな事態＞は、それによって不安定化した実母・実子間の授乳・哺乳関係の確立を保証する、授乳補助という負担を、群管理者に要求すると同時に、まさにこのような負担を抱え込むことを通じて、個体に直接接し

うような親和的關係を手に入れるだけでなく、その後に意味をもつことになる消費戦略に必要な、年齢をも含めた個体についての個別的な知識を、長期記憶として記憶に刻印する契機を用意した。

要約すれば、年齢に応じた計画的な間引きに必要な知識、そしてやがて搾乳を開始するに必要な、個体に接触することを許す親和關係は、出産時の授乳・哺乳關係への人為的な介入によって成立し、ひいてはその介入の成立因は、群の人の居留地への繫留とそれから必然的に生じた移動放牧によって、野生段階でスムーズに実現していた母子の相互認知が不安定となったことに求められるということになる。いまこれら、出産時の授乳・哺乳關係への人為的な介入、親和性の成立、年齢を割り出せる個体毎の知識の記憶の固定、年齢におうじた間引きといった出来事を、居留地への繫留とそれによってもたらされた移動放牧がもたらした〈新たな事態〉のなかで発生した、〈新たな出来事連鎖〉の第一の系列とっておく。おそらく、これら想定される一連の〈新たな出来事連鎖〉は、居留地への繫留と移動放牧と言う〈新たな事態〉のもとで、意外に短い時間経過の中で発生したと考えられる。

ところでここで、〈新たな事態〉がもたらした〈新たな出来事連鎖〉として、もうひとつの系列の連鎖があることを、さらに指摘しておかねばならない。

筆者は、ラジャスタンの牧民のキャンプ地で、生後2-3週間前後の新生児が、2-30頭あまりの群をなして、走り回っているのを見たことがある。このような新生児は、言うまでもなく昼間の放牧時は、キャンプ地にとどめおかれている。牧夫は、テントの隅に、柵を立て、長方形のその囲いの中で新生児を囲いこんでいることもある（インドのラジャスタンでの観察、およびギリシャのサラカッチャニでの観察）。また、ところによっては、洞窟などの狭い穴や、石垣で作った狭い囲いにそれらを囲いこんでいることもある（イランのバクチアリでの観察）。いずれにせよ新生児である同年集団がせまいところに押し込められ、時に外にだされて、キャンプ地の周辺で走り回ったり、柔らかい草を食べさせられているのである。さきに、捕獲された群の次世代が生まれることによって、人の居留地をホーム・レンジとした群ができるはずだと言っておいたが、まさにキャンプ地の周辺を群をなしてはしり回っているこの当歳児群の姿は、いまやキャンプ地をホーム・レンジとした集団の成立をしめしている。しかもこの姿は、単にそれだけでをあらわしているだけではない。そこには野生群とは異なる、同輩集団という新たな群の成立をあらわしているのである。

さきに再野生化群では、少なくとも6カ月までは、新生児は母親のホーム・レンジで、母親に近接したかたちで居とどまり、群は、そのような凝集性を示す母子単位の集まりというかたちで存在する。それにたいして家畜群では、このような凝集性はなく、いわばアモルフな均質群となっていて言っておいた。そして、いったいこのような群がどのようにして成立したのか。また、半家畜化されたトナカイでは認められない、外に対して閉じた輪郭が家畜群には形

成されているのはなぜか。このような問題を提起しておいた。

問題は、さきにみたような同輩集団としての新生児群が、キャンプ地の周りを走り回っているといった家畜群でみられる光景が、野生群でみられるかということである。まずこのようなことはみられない。それに対して、家畜群では、毎日母雌群は放牧にだされるために、野生群で母子の相互的接近がつよく認められる授乳期間中においてすでに、日々分離され、放牧中に近接する契機は断ち切られているのである。新生児群がキャンプ地の周辺を走り回っている光景は、母雌群の日毎の放牧ということによって、必然的にもたらされたひとつの産物なのである。そしてそこに、母子という垂直的な関係ではなく、同輩という水平的な関係をもった、均質的な群が創り出される契機が用意されている。いやそれだけでなく、キャンプ地をホーム・レンジとすることで、そこで固有の匂いを等しく身につけた集団が形成されている。こうして、他群に対して、自己がどの群に帰属するかを識別し、帰属群なりの行動をする個体からなる群、つまり外に対して濃い輪郭をもった群が成立しているのだ。

ではこのような状況はいつ発生したか。まさにここで想定している家畜化の時点、群の人の居留地への繋留、そしてそれによって必然的になったアダルト雌の移動放牧とともに発生したはずである。そして、毎年、このような自己群の帰属の記しともいえる固有の匂いを等しく身につけた同輩集団が、秋になるとともに母群に編入されることで、群全体がこのような集団によって占められるのに、さして時間はかからないはずである。さきに、群居性と追従性とを利用した群の放牧管理にとって、より均質的な群の方が、管理しやすいと言っておいたが、そのような群は、こうして、放牧による母子分離から必然化した新生児の共同保育と、その母群への編入の繰り返しによって、おそらく人の居留地への繋留からさして年を経ないあいだに成立したと考えられる。そしてこのような群の成立は、同時に、群への帰属性をもった個体からなる、外に対して閉じた輪郭をもった群の成立の時期でもあったというわけである。ここに〈新たな出来事連鎖〉の第二の系列が措定された。

以上、群の人の居留地への繋留と移動放牧の開始によってもたらされた、新生児をめぐる〈新たな事態〉は、一方では、

- 一) 放牧によるそれまでのナチュラルな母子間の授乳・哺乳関係の不安定化→管理者の母子間の授乳・哺乳関係への介助→個体レベルでの親和性と個体識別記憶の成立→年齢に応じた計画的消費、

という一連の出来事連鎖を、そして他方では、

- 二) 放牧による実母達のキャンプ地での昼間の不在→新生児の共同保育→群帰属性をもった同輩集団の形成→外に対して輪郭のある群の成立、
- という、ふたつの系列の出来事連鎖を招来することになる。

さきに管理項目として、出産時での母子介入のないトナカイ群では、群相互間の移出・混入

がしきりに起こるのに対して、母子介入のある家畜群では、そのような移出・混入がすくないという、相互に因果関係のない事象が、一見並行現象のように認められるのはなぜかと言う問いを発したのだった。その疑問はこうして、居留地への繋留と放牧という新たに招来された事態がもたらした、1) それまでの実母・実子間のスムーズな授乳・哺乳関係の危機に由来する第一系列の出来事連鎖、そして2) 放牧による実母達の不在と新生児集団の共同保育に由来する第二系列の出来事連鎖という、要は居留地への繋留と放牧という事態がもたらした二つの結果であったということで説明されるのである。

以上、われわれは、最初に提起した疑問：考古学者が残存消費遺骨の存在様態から、間接的ではあるが想定された、いわゆる考古学的な意味での家畜化の時点で起こった＜新たな出来事＞は、いったいいかなる人の介入とそれへの動物の側の対応、つまり相互的すり合わせの過程で発生したのか。具体的に言えば、そのような考古学的出来事の発生をうながした＜新たな事態＞とはいかなるものであったか。このような疑問に、再野生化群や半家畜化されたトナカイ群のあり方と家畜群のあり方とを比較検討することで、解をあたえることを試みたのであった。骨を通じて考古学者が見いだした＜新たな出来事＞とは、大約すると、I) 身体サイズの縮小化に示される生殖隔離と II) 個体毎の年齢に応じた計画的な消費戦略というものであった(第I章)。以上の検討を通じて言えることは、これらふたつの＜新たな出来事＞は、＜新たな事態＞がもたらした＜新たな出来事連鎖＞のうちの一部、つまり、第一系列に属する年齢に応じた計画的消費、第二系列に属する遺伝子交流回路の閉じた、外に対して輪郭のある群の成立とであり、考古学者は、それらを残存消費遺骨の存在様態の中に見いだしたということになる。

- 1) 家畜化の場についてのこのような想定は、中尾(一九六〇年代、京都大学人文科学研究所で主宰されていた今西研究会での発言)や Clutton-Brock などがすでに行っている(Clutton-Brock, J., 1978:50)。
- 2) 同様の投げ縄による個体の捕獲は、トナカイだけでなく、モンゴルでの野に放たれた馬についてもみられる。また、古代では野生のオナゲルを馴致して使用するために捕獲するさいにもなされた。
- 3) 考古学的な意味での家畜化の段階での、牧夫と幼児段階の羊・山羊との親和性の確立を示唆するデータとして、インダス中流の、いわばインド側でもっとも早く家畜化が開始された(ほぼ紀元前6000年)といわれているメヘルガルの遺跡から出土する埋葬遺跡が示す事実は興味深い。そこではおそらく牧民であったと考えられる死者の遺骨のわきに、その性差は判定できないが、二頭の若い山羊の完全な遺骨が併葬されている。現在、このような事例が二例、メヘルガル遺跡の発掘者であるメドウ等によって報告されており、かれは、家畜化の開始時点における、若い個体との関係を示唆するものと言っている。家畜化の時点において実際に起こった出来事として、筆者がここで示唆している管理者と幼児個体との出生時以来の親和性の確立と符合するものとして、その意味を重視したい。

- 4) ちなみにここで言うておくが、人が消費するための搾乳が、このような条件の到来によってただちに開始されたというのではない。しかも最初におこなわれた搾乳は、人間的利用を目的としてなされたものではないと筆者は考えている（谷，一九九三，一八―二一頁）。

VII おわりに

牧畜の技術は、いかにも道具使用において貧弱である。しかし道具を介さない技術というものも存在する。いや技術とは、人間の脳と自然環境との相互関係を通じて形成された行為連鎖として記述されるものであり、道具は、技術主体の身体技法の一部をなすに過ぎない。このような観点から分析をはじめて、以上で行ったことは、考古学的意味での家畜化の時点で起こったに違いない、人の介入と対象動物の対応という、相互的なすり合わせの過程を、＜一連の出来事連鎖＞として再構成することであった。

ところで、ここで人が関与している対象は、物理的なものではなく、群としての生物であった。しかもつねに新たに生まれ出てくる新生児によってメンバー交替する、社会的生物としての自然であった。そこで人は、あたかも教育によって、文化を、常に新たな社会的成員に埋め込まねばならない人間に似て、特定の状況下で、新生児に介入を繰り返して、いわば文化を埋め込まれたともいえる個体をつくりださなければならなかった。それも、管理者にとって都合のよい、管理者と当該対象個体との関係性を創出維持するためである。そこでは、むしろ物理的な強制ではなく、コミュニケーション的な感覚的な刺激を介した関係性の確立が重要となる。こうして、母子関係に介入して、野生段階とは異なる行動習性を与え、それを、管理者としての一連の介入技法の連鎖の中に組み入れる。このような一連の介入の連鎖が、考古学者が段階を画した時代に、上に述べたような＜新たな事態＞のもとで引き起こされ、毎年繰り返される介入の技法として、維持されることになった。このように言うことができるだろう。

しかも、この考古学的な意味での家畜化の段階に移行する以前は、たかだか半家畜化されたトナカイ管理に見られるような、いわゆる群レベルでの人づけしかなかったはずである。とするなら、考古学的な意味での家畜化の段階は、それまでは群レベルでの人づけしか成立していなかった段階から、個体についての知識と個体に対する親和性が成立する、個体レベルでの人づけが可能になる段階への移行の時期でもあったとも言うことができる。そういう意味で、筆者は、この時期を、「群レベルでの人づけ」段階から、「個体レベルでの人づけ」段階への移行期と呼ぶことにしている¹⁾。

もちろん、だからといってこの時期に、その後の牧畜にとって重要な介入項目のひとつである搾乳が同時に開始されたわけではない。考古学的意味での家畜化の時期から、搾乳の開始までのあいだは、肉の取得を目的とした牧畜段階というものがあったと考えられている。ただ、

搾乳の技法が成立するためには、個体レベルでの親和性にもとづく人づけが前提されていなければならない。また別個に紹介することになる、特定の個体を訓育することで、放牧群を誘導する技法が、中近東から地中海地域には分布している。じつはこのような技法もまた、個体レベルでの親和性にもとづく人づけなしには、成立しないのである。家畜化の過程と言うものは、先行する人と当該動物種とのあいだで成立した関係性を先行条件とした、サクセッシングなすり合わせの進行過程だと言いうるとして、中近東で開始されたといわれる考古学的な意味での家畜化の時点で成立した人-動物間の関係は、こうして搾乳をはじめとして、のちのさらなる牧畜の技法の展開を可能にする基本的な前提条件を用意したものだと考えたい。

- 1) 筆者は、一九八九年秋におこなわれたフィールド研究者懇話会のシンポジウム「ドメスティケーションをめぐる」(オーガナイザー: 松井健, 京都大学・京大会館にて, 十一月一五日開催)の発表において、考古学的な意味での家畜化を、「群レベルでの人づけ」段階から「個体レベルでの人づけ」段階への移行と呼ぶことにした。

参 考 文 献

- 今西錦司, 一九四八, 『遊牧論そのほか』秋田屋。
- 梅棹忠夫, 一九五〇～五一, 「乳をめぐるモンゴルの生態(I-II)」, 『自然と文化』, 自然史学会, 京都。
- 一九六五「狩猟と遊牧の世界(上・下)」『思想』二月号十～二九, 四月号六六～八八, 岩波書店。
- 太田 至, 一九八二, 「牧畜民による家畜放牧の成立機構」, 『季刊人類学』一三～四, 講談社, 一八～五六頁。
- 葛野活昭, 一九九〇, 『トナカイの社会誌』, 河合出版。
- 小長谷有紀, 一九九一『モンゴルの春』, 河出書房新社。
- 鄭 仁和, 一九九二, 『遊牧—トナカイ牧畜民サーメの生活』, 筑摩書房。
- 谷 泰, 一九七六「牧畜文化考」, 『人文学報』四二, 一～五八頁, 京都大学人文科学研究所
- 一九七六, 『牧夫フランチェスコの一日—イタリア中部山村生活誌』日本放送出版協会。
- 一九七七, 「イタリア中部山村移牧羊の管理について」, 会田雄次, 梅忠夫編『ヨーロッパの社会と文化』, 京都大学人文科学研究所, 一一七～一六七頁。
- 一九九二, 「家畜と家僕—去勢牡誘導羊の地理的分布とその意味」, 人文学報(七一), 五三～九六。
- 一九九三, 「誰が最初に乳を搾ったか」, 週刊朝日百科: 動物たちの地球一二一, 朝日新聞社, 一八～二一。
- 松原正毅, 一九八三, 『遊牧の世界—トルコ系遊牧民ユルックの民族誌から』(上下), 中公新書。
- 野沢 謙, 一九八七, 「家畜化の生物学的意義」, 福井勝義編『牧畜文化の原像—生態・社会・歴史』, 日本放送出版協会, 六三～一〇七頁。
- 松井 健, 一九八〇, 『パシュトゥン遊牧民の牧畜生活』, 京都大学人文科学研究所。
- 一九八九, 『セミ・ドメスティケーション—農耕と遊牧の起源再考』, 海鳴社。
- Beck, L., 1991 *Nomad, a year in the life of a Qasqā'i tribesman in Iran*. Berkeley: Univ. of

- California Press.
- Blaxter, K. L., Kay, R.B., Sharman, G. A. M., Cunningham, M. M. and Hamilton, W. J., 1974, *Farming the Red Deer*. Edinburgh.
- Bökönyi, S. H., 1969, Archaeological problems and methods of recognizing animal domestication. In P. J. Ucko and G. W. Dimbley (ed), *The domestication and exploitation of plants and animals*: 218-29. London, Duckworth.
- 1978, Environmental and cultural differences as reflected in the animal bone samples from five early Neolithic sites in Southwest Asia, In Meadow, R.H. and Zeder, M.A.(ed), *Approaches to faunal analysis in the Middle East*, Peabody Museum Bulletin, Harvard: 57-62.
- 1989 Definition of animal domestication. In Clutton-Brock, J.(ed) *The walking larder*, London:Unwin Hyman: 22-27.
- Bosseneck J. and A. von Driesch, 1978, The significance of measuring animal bones from archaeological sites. In Meadow, R.H. and Zeder, M.A.(ed), *Approaches to faunal analysis in the Middle East*, Peabody Museum Bulletin, Harvard: 25-39.
- Clutton-Brock, J.,1978, Bones for the Zoologist, In Meadow, R.H. and Zeder, M.A.(ed), *Approaches to faunal analysis in the Middle East*, Peabody Museum Bulletin, Harvard: 49-51.
- Early Domestication and the ungulate fauna of the Levant during the Pre-pottery Neolithic period. In Brice, W.C.(ed.), *The environmental history of the Near and Middle East since the last Ice Age*, London Academic Press.
- 1987, *A natural history of domesticated mammals*, Cambridge Univ. Press.
- Craig, J.V., 1981, *Domestic animal behavior: causes and implications for animal care and management*, Englewood Cliffs.
- Davis, S.J.M., 1982, Climatic change and the advent of domestication: the succession of ruminant artiodactyls in the late Pleistocene-Holocene in the Israel region, *Paléorient* 8: 5-15.
- Digard, J.P., 1981, *Techniques de nomades baxtyâri d'Iran*, Cambridge University Press.
- 1990, *L'homme et les animaux domestique*, Paris, Fayard
- Ducos, P., 1978, "Domestication" defined and methodological approaches to its recognition in faunal assemblages. In Meadow, R.H. and Zeder, M.A.(eds), *Approaches to faunal analysis in the Middle East*, Peabody Museum Bulletin, Harvard: 53-61.
- Engels, F. 1884 *L'origine de la famille, de la propriété privée et de l'Etat*, Paris, Edition Sociales, 1983
- Geist, V., 1971, *Mountain Sheep: A study in behavior and evolution*. Chicago.
- 1974 The behavior of Ungulates and its relation to management. *IUCN Publications New Series* 24, International Union for Conservation of Natural Resources.
- Glatzer, B., 1977, *Nomaden von Gharjistan*, Beiträge zur Südasien-Forschung, Universität Heiderberg.
- Hatt, G., 1976, Notes on reindeer nomadism. *Memoirs of the American Anthropological*

- Association, vol. 5, New York.
- Hole, F., 1989, A two-part, two stage model of domestication, In Clutton-Brock, J.(ed), *The walking larder*, London:Unwin Hyman: 97-104.
- Hunn, E., 1979, The abomination of Leviticus revised, In R.F. Ellen and D. Reason(ed), *Classification in their social context*, Academic Press: 103-116.
- Jarman, P.J., 1974, The social organization of antelope in relation to their ecology, In *Behavior*, Leiden, E.J. Brill.
- Jewell, P.A., Milner, C., and Boyd, J.M., 1974, *Island survivors: The ecology of the Soay sheep of St. Kilda*. London.
- Lechevallier, M., Meadow, R. et Quivron, G., 1982, Dépôts d'animaux dans les sépultures Néolithiques de Mehrgarh, Pakistan, In *Paléorient* 8/1: 99-102.
- Lee, R.B. & De Vore, I (ed), 1968, *Man the hunter*, Aldine, Chicago.
- Legge, A.j. and Rowley-Cowney, P.A. 1987, Gazelle killing in Stone Age Syria, *Scientific American*, 255: 88-95.
- Leroi-Gourhan, A., 1964, *Le geste et la parole*, vol. 1-2. Paris, Albin Michel.
- Meadow, R.H., 1989, Osteological evidence for the process of animal domestication. In Clutton-Brock, J.(ed), *The walking larder*, Unwin Hyman, London, pp.80-90.
- Morgan, L. 1877 *La société archaïque*, Paris, Anthopos, 1985.
- Ohta, I., 1982, Man-animal interaction complex in goat herding of the pastoral Turkana, *African Studies Monographs*, Supplementary Issue 1, Kyoto Univ, Kyoto: 13-42.
- Payne, S., 1975, Faunal change at Franchthi cave from 20,000 BC to 3,000 BC, In A.T. Clason(ed.) *Archeological Studies*, Amsterdam, New York, North Holland: 120-131
- Rinley, T. & Caughley, G., 1959 A study of home range in a feral goat herd. *New Zealand Journal of Science*, 2 : 150-170.
- Shikano, K., 1984, On the stability of the goat herd in the pastoral Samburu, *African Study Monograph*, Supplementary Issue 3 : 59-69.
- Tani, Y., Matui, T. & Omar, S., 1980, The pastoral life of the Durrani Pashtun nomads in southeastern Afghanistan, In Tani, Y.(ed), *Preliminary report of comparative studies on the agrico-pastoral peoples in southwestern Eurasia*, Research Institute for the Humanistic Studies, Kyoto University, Kyoto: 67-86.
- Tani, Y., Kobayashi, S. & Nomura, M., 1980, Man-sheep relationship in the flock management technics among north Carpathian shepherds, In Tani, Y.(ed), *Preliminary report of comparative studies on the agrico-pastoral peoples in southwestern Eurasia*, Research Institute for the Humanistic Studies, Kyoto University, Kyoto: 67-86.
- Tani, Y., 1982, Implications of the shepherd's social and communication interventions in the flock, In Tani. Y. (ed.), *Preliminary report of comparative studies on the agrico-pastoral peoples in southwestern Eurasia*, Research Institute for the Humanistic Studies, Kyoto Univ.
- Tani, Y., 1987 Two types of human intervention into the sheep flock: intervention into the mother-offspring relationship and raising flock leader. In Tani, Y.(ed)

- Domesticated plants and animals of the southwestern Eurasian agro-pastoral culture*, vol.2, The Research Institute for Humanistic Studies, Kyoto Univ : 1-42.
- 1989, The geographical distribution and function of sheep flock leader: A cultural aspect of the man-domesticated animal relationship in southwestern Eurasia. In Clutton-Brock, J.(ed.), *The walking larder*. London: Unwin Hyman: 185-199.
- Telcianu, R., 1979, *Terminologie oiereasca in Comuna Maieru, Județul Bistrița-Nasaud*, (Dissertation for Ph.D., Univ. of Cluj)
- Trinchieri, R., 1941, *Vita di pastori nella Campagna Romana*, Roma, Fratelli Palombi.
- Uerpmann, H.P. 1978. Metrical analysis of faunal remains from the Middle East. In Meadow, R.H. and Zeder, M.A.(ed), *Approaches to faunal analysis in the Middle East*, Peabody Museum Bulletins, Harvard: 41-45.
- 1989, Animal exploitation and the phasing of the transition from the Paleolithic to the Neolithic. In Clutton-Brock, J.(ed.), *The walking larder*. London: Unwin Hyman: 191-196.